

祝福

作

折田

登場人物

【一部】(1～4)

リーレリアツカンパーネ 祝福の魔女  
シキ 村の子供  
メカ 村の子供  
青年 記者の青年  
泥棒少年 浮浪児  
メテン 浮浪児  
コージ 浮浪児  
村長  
おじさん  
おばさん  
悪魔祓い1、2、3  
おばば様 リーレの祖母  
トメさん 鶏。声のみ  
メメさん 鶏。声のみ  
村人たち(警察官、子供、果物屋、大勢の村人など)

【二部】(5～9)

リーレ 学生  
しーちゃん お見舞いに通う女の子  
かったん 病気の男の子  
青年 司書  
市民(学生1、2、少年1、2、3、妹、女店員、男店員、看護婦、病人、衆合先生、不審者など)  
おばば様 図書館に通う小学生  
黒縄先生 心療内科の先生  
サトー 喫茶店にいた女客  
シマダ 喫茶店にいた女客  
厄の魔女

いまより、ずっとずっと昔の話。

ここはアツカンパーネ(以下リーレ)の本屋。壁一面に本が並び、今にも雪崩が起きそう。ところどころに謎の草やキノコが生えて、庭には使い魔の鶏が二羽。

リーレ、暖炉の傍で椅子に座り難しそうな顔で本を読んでいる。暖炉上には婆様の肖像画が掛けられている。

そこにシキ、メカが勝手に入ってくる。シキ、パンの入ったかごを持っている。

シキ 「祝福の魔女アツカンパーネー！」

メカ 「祝福の魔女アツカンパーネー！」

リーレ 「またベル鳴らさなかったでしょ」

シキ 「え？ な、鳴らしたよねえ？」

メカ 「おう。夢中すぎて気づかなかったただけじゃねえの」

リーレ 「そうかな……どっちでもいいか」

シキ 「どっちでも良い、どうでも良い」

リーレ 「どうでも良くはないけどね」

シキ 「あ、そうだ。これ、お母さんから。お店の余りだけどって」

リーレ 「ありがと。お礼言つといて」

シキ 「うん」

メカ 「なあなあなあ、それ何読んでんの？」

リーレ 「これ？ フン(表紙を見せて)古代魔術書。絶版なんだからね」

シキ 「絶版？」

メカ 「もう売られてないってことだよ。アツカンパーネが読むなんて、よっぽど

面白いの？」

リーレ 「全然もうまったく面白くない。なにこれ、ここに書いてあること全部嘘だし。法螺も良いところだよこれ誰だよ作者ったく(最後のページを見て)うわ、おばば様だ」

メカ 「え、お前のばあちゃん嘘つきなのかよ……本物の魔女だったのに……」

シキ 「あーお前なんて言っちゃダメなんだあ」

メカ 「うるせ」

リーレ 「おばば様のこと悪く言いたくないけど、こういう事が出来たら良いなって夢が詰まりすぎ。まあでも、子供が読むには面白いかもね……(と、2人を見る)」

シキ 「読みた〜い！」

メカ 「おいシキ、オレら今バカにされたんだぞ。(リーレに)もう子供じゃないも  
んねバーカバーカ」  
リーレ 「バカっていうほうがバカなんですバーカ」  
メカ 「きいいいい」  
シキ 「こ、子供だ……」  
メカ 「つか、面白くないなら何で読んでんだよ」  
リーレ 「聞いちゃう？ 聞いちゃう？」  
メカ 「やっぱいいい」  
リーレ 「聞きなさいよ！ 今から私、インタビュー受けちゃうんだから」  
シキ 「誰から？」  
メカ 「よっぽどの物好きからだろ」  
リーレ 「それはそうなんだろうけどさ……」  
シキ 「(シキに)肯定すんな。魔女について調べてるんだって。だからほら、それ  
らしいところ見せちゃおう、みたいなの？ ちょっと魔女っぽい本読んど  
こっかな、みたいなの？」  
メカ 「見栄を張るなんて虚しい魔女だな」  
リーレ 「お前はマジで魔女を恐れなさすぎ」  
シキ 「私もいていい？ アツカンパーネがインタビューされてるとこ見てたい  
な」  
メカ 「ダメよ、アンタたちがいると絶対に邪魔してくるんだもん」  
リーレ 「そんなことないぜ。オレたちだってアツカンパーネのこといっぱい話して  
やるよ。なあ？」  
シキ 「うん。アツカンパーネは見栄張りで面倒くさがりで本が嫌いを使い魔は庭  
にいる二羽の鶏で睡眠時間は13時間」  
リーレ 「はい。帰れ」  
シキ 「やだよお」  
リーレ 「絶対だめ。いい？ 絶対だめ」  
メカ 「ちえ……こうなりやダメだな……」  
シキ 「じゃあ、魔法見せて！ そしたら今日は大人しく帰るからさあ！」  
リーレ 「一応聞くけど、何してほしいの？」  
シキ 「え、うーん。うーんとね、……メカ何がいい？」  
メカ 「え？ お、おう……あっ、オレ雪見たい！ 雪降らせてよ！」  
リーレ 「雪なら先週降ったでしょ」  
メカ 「今日見たいの！ うーんと遊べるぐらいにさ、こう、ドバドバ降らせて  
よ！」  
リーレ 「寒。却下」

「じゃあ、ちょっとだけ。ね？」

シキ  
「簡単につけてくれるけど、祝福するのは本来そう易々と見せるものじゃないんだからね」

2人  
「魔法！ 魔法！（リーレが使うまで絶え間なくコール）」

リーレ  
「（コールに被せて）やーだ。アンタたちが思ってる以上に疲れるの」

2人  
「魔法！ 魔法！」

リーレ  
「今から記者の人もくるのに、雪なんか降ったら大変でしょ」

2人  
「魔法！ 魔法！」

リーレ  
「わかった。あのね、ほんと、アンタたちもうちょっと私の凄さ理解してよ」

メカ  
「雪だ〜！」

シキ  
「雪だるまだ〜！」

リーレ  
「そこまで降らせないから」

リーレ、目を閉じ、膝の上で指を組む。小さく祈っているようにも見える。外、少しずつ雪が降り出す。

2人、窓を覗き、雪が降っていることを確認して歓声をあげる。

シキ  
「雪だ」

メカ  
「おう」

シキ  
「雪だるまつくりながら帰れるかな？」

メカ  
「そこまで降らないって。アツカンパーネ、ケチだから」

シキ  
「祝福の魔女なのにケチだからね」

リーレ  
「誰がケチだ」

ドアがノックされる音。

リーレ  
「あつ、来たかも」

メカ  
「どうぞ勝手にお上がりくださいさあーい！」

リーレ  
「アンタたちは帰れっのー！」

シキ  
「祝福の魔女が怒った！」

メカ  
「また来るなー！」

リーレ  
「はいはあい。シキ、お母さんにお礼忘れないでねー！」

シキ  
「分かってるー！」

2人と記者の青年、入れ替わるように。青年、少しおどおどしながら登場。

リーレ 「ディーさん。お待ちしていました」

青年 「ご無沙汰してます。今日は取材を受けていただいて本当にありがとうございます  
います」

リーレ 「こちらこそ、何のもてなしも出来なくて申し訳ないんですけど、あ、よか  
ったら座ってください」

青年 「ありがとうございます。そうだ、今雪が降ってきたんですよ。ご覧になり  
ましたか？」

リーレ 「え？ ああ、実は私が降らせたんです。もうすぐにやめますから」

青年 「(感心して)はあ、雪を。となると、雨や雷なんかも？」

リーレ 「雨なら、まあ。雷は無理ですけど」

青年 「へえ。やっぱり、雷は力をかなり使うから……ですか？」

リーレ 「いえ、単純に怖いからです」

青年 「誰が？」

リーレ 「私が」

青年 「(微笑んで)なるほど、アツカンパーネさんは雷が苦手なんですね。フッフ」

リーレ 「おかしかったですか？」

青年 「ああ、いえ、僕も苦手です。それにしても、またどうして突然雪を？」

リーレ 「さっき子供とすれ違ったでしょう。あの子たちが雪を降らせろとうる  
さくて」

青年 「元氣な子たちでしたね」

リーレ 「本当かないませんよ」

青年 「あの子たちのための魔法ですか。素敵ですね」

リーレ 「いやー、アイツら一度言い出すと私が祝福するまで魔法コールやめない  
んで、仕方なく」

青年、頷きながらメモに書き込んでいく。

リーレ 「あー、聞きたいことがあったら、遠慮なくどうぞ。この村唯一の魔女  
ですし」

青年 「ありがとうございます。あの、あちら(暖炉の上を見て)のお写真は？」

リーレ 「私の祖母です。ツェザー＝アツカンパーネって聞いたことありませんか？」

青年 「ああ、彼女がああ。お顔を拝見するのは初めてです」

リーレ 「似顔絵なんてこれしか残ってないでしょうね、祖母はじっとしていられな  
い質だったので。本を読むときですら、こう、歩き回りながら読むんです  
よ。おかしいの何の」

青年 「笑いながら」お婆様は本がお好きだったんですか？」

リーレ 「ええ、ここにある本は全て祖母が祖父と一緒に収集したものでらしいですよ。ま、私にとっては正直邪魔以外の何ものでもないもので早く全部売っちゃいたいんですけどね、如何せんマニアックなものばかりで誰も買ってくれなくて」

青年 「ちなみに、お爺様は」

リーレ 「私が生まれる前に亡くなってます。実は母も私が生まれると同時に亡くなりまして、父はその直後、馬に蹴られて死んだとか、なんとか」

青年 「そうでしたか……」

リーレ 「ああ、全然全然。会ったこともない人に悲しみなんてありませんし、私には祖母がいまいたから」

青年 「そうですか。素敵なお婆様だったんでしょうね」

リーレ 「うーん、歩きながら本を読む時点で素敵とは言い難いんですけど。まあ、素敵でした」

青年 「不躰かとは思いますが、お婆様は、おいくつで？」

リーレ 「80で。随分と長生きしてくれましたよ」

青年 「そうですか。魔女は不死身だと唱える者もいるのですが」

リーレ 「(笑いながら)いやいやいや、不死身はないですよ。歳もとるし死にます死にます。ただまあ、私もその話は聞いたことがありますよ。多分、キオクガエリのせいですね」

青年 「キオクガエリ？」

リーレ 「ええ。魔女は他の誰かとして生まれ変わってなお魔法が使える。他の誰かとして生まれ変わってなお前世の記憶を有するんです。つまり、私は何度死んで何度生まれ変わっても、ずっとリーレⅡアツカンパーネなんですよ」

「ずっと、ですか」

リーレ 「祖母は「あたしや今回で3度目の人生だよお」とか「前回のほうが美女だったねえ」とか言っていましたけど」

青年 「(食いついて)ち、ちなみにアツカンパーネさんは」

リーレ 「まだ1回目です」

青年 「(残念そうに)そうですか」

リーレ 「ネタ提供できなくて申し訳ないです」

「なんでアツカンパーネさんが謝るんですか。あの、では魔女は身体を変えながら、永遠を生きるということなんですわ」

リーレ 「はい。あ、でも、死ねないわけじゃないんですよ」

青年 「はあ」

リーレ 「ああ、今世でもう終わって良いなあってときにはね、死の間際、枕元に火

青年  
を灯したろうそくを立てておくんです。それが魔女の終わりなんです  
て。おば様様の母親も、そうしたそうで」

「なるほど、ろうそくを」

リーレ  
「ええ。本当はろうそくじゃなくても良いらしいんですけど、とりあえず、  
死の瞬間に火があれば」

青年  
「はあ。興味深いですね、ちょっと今までのお話をまとめさせていただき  
ます」

青年、ひたすらメモ帳に書き込む。

リーレ、ふと置きっぱなしのパンを見て。

「そうだ、パン……。ディーさんって紅茶は好きですか？」

青年  
「はい。あ、お構い無く」

リーレ  
「私が飲みたいんで。ゆっくりしててください」

と、リーレ袖に引っ込む。

そのうちにリーレ、戻ってくる。

リーレ  
「お湯が沸くまでかかりそうです。あ、先にパンでもいかがですか？ 美味し  
いんですよ、このパン」

青年  
「ありがとうございます。あの、変なことをお聞きするかもしれないんです  
けど」

「はい？」

「その、お湯って魔法でポンっと」

リーレ  
「沸かせられないのかってことですよね。出来ますよ、一応」

青年  
「えっ、あつ、あの、見せていただくことって」

リーレ  
「いいですよ。シヨボいけど」

青年  
「魔法にシヨボいも何もないですよ！ うわー、魔法使うところってはじめ  
てだ……」

リーレ、目を閉じる。膝の上で指を組む。  
しばしの沈黙。

台所からポー！と音が聞こえる。

リーレ  
「あ。沸いた沸いた(台所へ向かう)」

青年  
「今ので終わりですか？」

リーレ声

「言ったでしょう、シヨボいって」

青年

「いえ、魔法という時点でシヨボいことは全く」

リーレ声

「いいんですよ。呪文唱えないのって思ったでしょ」

青年

「えっ!? ま、まさか魔法で僕の心を読んだんですか!？」

リーレ、ティーポットとカップを盆に乗せて戻ってくる。

リーレ

「魔法は使ってないですよ」

青年

「(残念そうに)そうですか」

リーレ

「あ、使ってほしかったんですね……」

このあたりでこっそりシキとメカが登場。物陰に隠れてリーレと青年の様子を見ている。

リーレ、喋りながら紅茶をカップに注いだりして用意を整え。

リーレ

「どうぞ」

青年

「どうも」

リーレ

「今回のインタビューって、その、記事になったりするんですか？」

号外、みたいなの。フフフ、やだあ」

青年

「いえ。ただの趣味なので」

リーレ

「そうですか」

青年

「あつ、でも、いつか本にしたいなって思ってたまして!」

リーレ

「本? ふうん……」

青年

「あれ? 思ってたよりも反応が薄い」

シキ

「アツカンパーネ、本になるの!？」

メカ

「バカッ」

青年

「わあっ」

リーレ

「シキ! ってことはメカ!」

メカ

「もう、シキのせいでバレたじゃん」

青年

「あつ、きみたち確か雪の……」

シキ

「雪? 私はシキよ」

青年

「シキちゃんか。僕はデイー」

メカ

「オレ、メカ。アツカンパーネのインタビュー、オレたちも手伝ってやるよ!」

青年

「それは頼もしいね」

リーレ

「余計なことしないで。祝福すれば今日は帰るって約束したじゃん」

メカ 「余計なことなんかしねえよ。オレたちちゃんと手伝えるぜ」  
シキ 「うん！ アツカンパーネは見栄張りで面倒くさがりで本が嫌いを使い魔

は庭にいる二羽の鶏で睡眠時間は13時間」

青年 「へええ！ 13時間も！」

リーレ 「言うと思った」

メカ 「な？ オレたち役に立つだろ？」

リーレ 「どこが？」

青年 「庭にいる二羽の鶏の使い魔というのは」

リーレ 「ああ、すごく有能な子たちなんですよ。どっちも女王様気質なんですけど

そこがまた可愛くて」

青年 「使い魔ってどんなことをするんですか？」

リーレ 「卵を産みます」

青年 「鶏だ」

メカ 「せっかくだし見せてやるよ。ついてこい！」

青年 「はい！（ついていく）」

リーレ 「待って待て」

シキ 「ついてこい！」

リーレ 「はい！ ってあのね」

4人、庭へ向かい退場。

2

数日後、村の広場。

村人たちが行き交い、賑わいをみせはじめ。

リーレ、買い物荷物を抱えて登場。

おじさん 「やあ」

リーレ 「こんにちは」

おじさん、退場。

リーレ、近くのベンチに座る。

ポケットからメモ(買い物リスト)を取り出し確認。

近くをおばさんが通り掛かる。

おばさん 「大荷物ねリーレちゃん」

リーレ 「ケーキの材料買いにきたんですけど、気がついたらこんなになっちゃいました」

おばさん

「あら、誰かお誕生日？」

リーレ

「友人が明日なの。それより今度何か買いにきてよ」

おばさん

「買ってあげたいけど、本なんて読まないからねえ。それにリーレちゃんのところは特に、少し変わった本が多いじゃない？」

リーレ

「まあ」

おばさん

「料理のお裾分けになら行くわ。また今度」

リーレ

「ありがとう」

おばさん、退場。

リーレ、立ち上がろうとする。

声

「ドロボー！」

と声が聞こえたと同時に泥棒の少年、駆け足で舞台に登場。

後ろを確認するため一瞬だけ立ち止まり、もう一度駆けていこうとする。

リーレ、透かさず指を組み祈りのポーズ。

逃げようとした泥棒の少年、その途中で急に転ぶ。

泥棒少年

「何だ！？(何かに掴まれた！)」

警察官、村人の女すぐに追って登場。

警察官

「このガキ！(と泥棒少年を捕まえる)」

村人の女

「そんなパン、欲しけりゃくれてやるさ！」

村人の女、泥棒少年の頬をぶつ。

村人の女

「(警察官に)それじゃ、どうぞよろしくお願いしますね」

村人の女、もう一度泥棒少年の頬をぶって「汚らわしい」など文句を言いながら退場。

警察官

「罪は重いぞ。覚悟しろ(と無理やり引っ張る)」

泥棒少年

「くっ(引っ張られながらもがく)」

リーレ、落ちている紙袋を拾い上げる。

泥棒少年、隙を見て逃げ出そうとするが、うまくいかずに取り押さえられ警官らと共に退場。

リーレ、残されたパン(紙袋)を拾おうとする。

小汚ない子供2人(浮浪児)が素早く登場し、リーレより先にパンを拾う。子供とリーレ、一瞬見つめあう。

子供2人、足早に来た道に戻っていく。

リーレ、荷物を持ち、帰ろうとする。

その途中で青年が登場。リーレを見つけて駆け寄る。

青年 「先日はどうも、アツカンパーネさん」

リーレ 「ディーさん」

青年 「騒ぎを聞いて来てみたんですが、どうにも一足遅かったみたいです」

リーレ 「あ、お仕事ですか」

青年 「ええ、次回の記事は僕の担当で。大荷物ですね」

リーレ 「ケーキの材料買いにきたはずなんですけど、気がついたらこんなになっちゃって」

青年 「分かります。目に入るとついつい買っちゃうんですよ」

リーレ 「そうなんですよ」

青年 「お持ちますよ。ご自宅で宜しいですか？」

リーレ 「あ、まだ買い物残ってるんで、お気持ちだけもらっておきます」

青年 「それ、ご迷惑でなければお付き合いしても良いですか？ まあ、ぶっちゃけ、魔女の話を知りたいだけなんですけど」

リーレ 「いいですよ。仕事は大丈夫なんですか？」

青年 「期限はまだありますから。それに実は、やっぱり以前のインタビューを使わせてもらうことになりそうなので、もうほとんど終わってるようなものなんですよ(と、荷物を持って)」

リーレ 「そうなんですか！？ きゃー、恥ずかしいー！」

青年 「アハハ、すっげー嬉しそう」

リーレ 「あっ、ありがとう。半分持つわ」

青年 「これくらい軽いですよ。それよりさっきの騒ぎ、もしかしてご覧になってました？」

リーレ 「ええ」

青年 「もしよかったら聞かせてもらえませんか？」

リーレ 「お話することもないぐらい短い騒動だったんですよ。ドロボーって悲鳴が聞こえてから……(退場するまで続ける)」

2人、会話をしながら退場。

場所は変わり、アツカンパーネの書店。  
再びリーレと青年が会話をしながら登場。リーレの腕に、小さな荷物が増えている。

リーレ 「へえ、随分と熱心に調べているんですね」

青年 「昔からどうにも魔女への憧れが強くて。先日リーレさんからお話をお伺いしたのがキツカケで、他の魔女からも是非話を聞いてみたくなっただんです」

リーレ 「でも王都って随分遠いでしょう。丸3日はかかるんじゃないですか」

青年 「それが丸1週間だそうで」

リーレ 「うわ倍以上」

リーレ、青年、書店のなかの適当な机に荷物を下ろす。

リーレ 「適当に寛いでくださいいね」

青年 「ありがとうございます」

リーレ 「……そっか、王都……」

青年 「どうかされましたか？」

リーレ 「いえ。……ディーさんって、村を出たことはありませんか？」

青年 「全く。なので今回がはじめてで、実はすごいドキドキしてます」

リーレ 「フフフ、私も無いんです。無いどころか、今ディーさんから話を聞くまで、この村以外にも土地があって、人がいて、そんな当たり前のことを忘れてた気がします」

青年 「他の村や街の話なんて、全然耳にしないですからね。確かに、僕も普段はあんまり意識していないな……」

リーレ 「当たり前って、なんか難しいですね」

青年 「本当に」

リーレ 「せっかくなんでゆっくりしてってください(と荷物を台所まで運ぼうとする)」

青年 「ああ、手伝いますよ」

リーレ 「何から何まですみません」

青年 「好きでやっていますから」

2人、荷物を持って台所へ。  
シキとメカが登場。

メカ 「祝福の魔女アツカンパーネ〜！」  
シキ 「祝福の魔女アツカンパーネ〜！」

が、誰もいない。

シキ 「アツカンパーネ？」  
リーレ声 「アンタ達またベル鳴らさなかったでしょ」  
メカ 「何してんの？」  
リーレ声 「買い出しの片付け」  
シキ 「手伝おうか？」  
リーレ声 「いい、すぐ終わるから」  
メカ 「隠れて驚かせよう」  
シキ 「うん」

2人、隠れ場所を探し、隠れる。

リーレと青年戻ってくる。

リーレ 「あれ？ シキ？ メカ？」  
青年 「帰ったんですかね？」  
シキ 「あつ、デイーだ！（と現れて）」  
メカ 「もー、驚かせようって言ったのに（と現れて）」  
リーレ 「どのみち驚かないわよ。同じ手に21回も引っ掛かると思ってたんの？」  
メカ 「20回目まで引っ掛かったクセに」  
青年 「こんにちは」  
シキ 「こんにちは」  
メカ 「また取材に来たのかよ？」  
青年 「ううん、今日は魔女さんのお手伝いで」  
メカ 「おい、とうとうアツカンパーネのやつ、人間を使い魔にしやがったぜ……」  
シキ 「祝福の魔女なのにね……」  
リーレ 「メカ、それはデイーさんに失礼よ」  
青年 「(照れたように)いえ、光栄です」  
リーレ 「なにが？」  
シキ 「アツカンパーネ、ねえねえ」  
リーレ 「なに」  
シキ 「明日がなんの日か知ってる？」

リーレ 「明日？ さあ、何かあったかしら」

シキ 「えく？ 明日は(メカに口を押さえられ)ぶぐぐ」

メカ 「なんでもないわバーカ！」

リーレ 「バカっていうほうがバカなんですう。なんで急にキレられなきゃいけないのよ」

メカ 「こんなヤツ知らねえ！ 帰ろうぜ！」

シキ 「やだよお。来たばかりじゃん」

メカ 「じゃあオレ1人で帰るもんね！」

シキ 「バイバイ」

メカ 「そこは一緒に帰るって言えよ！ あー知らないからな！」

メカ、退場。

シキ 「アツカンパーネ、本当に知らない？」

リーレ 「何が？」

メカ声 「シキ！」

シキ 「ううん。私も帰る」

リーレ 「明日が何の日かは知らないけど、2人とも明日は絶対遊びに来てよ」

シキ 「いいよ、わかった」

シキ、退場。

青年 「明日、何の日なんですか？」

リーレ 「メカの誕生日です」

青年 「ああ！ それでケーキを！」

リーレ 「ちょっとかわいそうなことしちゃったかなあ」

青年 「ま、明日になれば分かりますから」

シキとメカ駆け足で登場。

シキ 「やっばり覚えてたんじゃん！」

メカ 「アツカンパーネのケーキ、絶対まずいからヤダ！」

リーレ 「ちよっともう〜！」

青年 「僕の声、大きかったですか」

リーレ 「いえ、盗み聞きしてただけでしょうから」

シキ 「もう。メカ、そこですっごい落ち込んでたんだよ」

メカ 「おいバカ、違う！」

リーレ 「へえ……」

メカ 「バーカ違うバーカ！ 笑うなバーカ！」

リーレ 「あっそ。じゃあいいもんね、ケーキつくるのやめよおっと」

メカ 「えっ？」

リーレ 「どーせアツカンパーネのつくったケーキなんて美味しくないんだもんねえ。つくるのも面倒だしなあ」

メカ 「た、食べないって言ってねえよ……」

シキ 「(泣いて)やだあ。メカの誕生日お祝いしてよお」

メカ 「おいおい」

リーレ 「ご、ごめんで、祝う祝う、つくるつくる」

シキ 「本当に？」

リーレ 「うん」

シキ 「嘘ついたら針千本飲む？」

リーレ 「発想が怖いな。大丈夫、ちょっと意地悪言っちゃったけど、最初から祝うつもりだったし」

青年 「アツカンパーネさん、さっきケーキの材料買いに行ってたんだよ」

メカ 「ふ、ふーん……」

リーレ 「お婆様がずっと言ってたのよ。誕生日はその人にとって最も祝福すべき日だから、大切な人の誕生日は一等祝福しなさいってね」

青年 「ほお、なるほど……(とメモをする)」

メカ 「アツカンパーネのばあちゃん、嘘つきだけど良いこと言うんだな」

リーレ 「あのね。お婆様は基本凄い人だから」

シキ 「(肖像画を見て)凄い怖い人？」

リーレ 「いや、私には優しくかったわ。ちなみにはあれはジツとしているのが嫌過ぎて凄んでるだけ」

青年 「極度の人嫌いで有名ですよね」

リーレ 「ええ。買い物は使い魔に任せて、自分では絶対に行きませんでしたし」

青年 「使い魔にですか！ あの、お婆様の使い魔は、今はどちらに？」

リーレ 「庭にいる二羽の鶏のうちの、一羽です」

青年 「に、鶏が買い物……すごい……！」

ベルの音。

声 「アツカンパーネ書店さん」

リーレ 「はあい、今行きます(と出ていく)」

シキ 「お客さんかな」  
メカ 「違うだろ」  
青年 「お客さんはあんまり来ないの？」  
メカ 「あんまりってどうか、全然だよ」  
シキ 「この本は変なのばかりだからなんだって」  
青年 「へえ。僕なんて全部欲しいくらいなのにな」  
シキ 「えっ、デイーお金持ちなの？」  
青年 「ううん。逆」

リーレ、手紙を片手に戻ってくる。

リーレ 「役所からだわ」  
シキ 「そのお手紙やだ……」  
リーレ 「え？」  
青年 「僕のところにも来ました。多分、納税関連ですよ」

リーレ、手紙を読む。

リーレ 「ええ？ 3倍!？」  
青年 「さ、3倍!？ 僕は1・5倍だったのに」  
リーレ 「店持ちは3倍みたいです。げえ、そんなにお金足りてないのかな」  
青年 「裕福な村ではないですからね。だからって、これだけ納税額が上げられると生活が……」  
メカ 「アツカンパーネ」  
リーレ 「ああ、悪いわね、変な話しちゃって」  
メカ 「違うんだ。お金の話、分かるし」  
リーレ 「そう。アンタ賢いもんね」  
メカ 「シキのお母さん、お金がないから、店閉めなきゃいけないんだって」  
リーレ 「そんな」  
メカ 「メカ」  
「アツカンパーネ、祝福の魔女なんだろう？なあ、シキのお母さん助けてよ。オレ、シキのお母さんのパン好きなんだ」  
リーレ 「わたしも好きよ」  
メカ 「喋りかけて」  
リーレ 「(すぐにかぶせて)でもね、その祈りは聞けないの。ごめんね……」  
メカ 「オレ、誕生日のプレゼントいらないよ。ケーキも我慢するから」

リーレ

「ごめん……。2人ともごめんね……」

シキ

「ううん、アツカンパーネは悪くないよ。メカ、ありがとう」

メカ

「でも」

シキ

「大丈夫だよ、お母さんもね、大丈夫だって言ったの。あのね、仕方ないことなんだって。あのね、お母さんがね、もっと可哀想な子がいっぱいいるんだよって言ったの。家もなくて、ご飯も全然食べられない子がいるんだって。だからね」

リーレ

「(遮り)シキ」

シキ

「(泣きそうになり)もう売らないけど……つくったら、アツカンパーネにもあげるからね……」

リーレ

「うん」

シキ

「お母さんのパン、美味しいからね……」

リーレ

「うん……」

暗転。

3

リーレの夢の世界。

リーレ、祈りのポーズをとり目を瞑っている。

そこにおば様が登場。

おばば様

「リーレ、何をしているんだい」

リーレ

「祝福できないの。メカが助けてって泣いているのに、祝福してあげられないの」

おばば様

「リーレ、お前は優しい子だね」

リーレ

「優しくないの。祝福してあげられないの。どうして？ どうして祝福できないの？」

おばば様

「リーレ、その祈りはね、人間の欲、人間の業そのものだからなんだよ」

リーレ

「どうしていけないの？ 私メカが好きよ。シキが好きよ。シキのお母さんも、シキのお母さんがつくるパンも好きよ」

おばば様

「リーレ、あまり村人に感情移入してはダメだよ」

リーレ

「どうして？ 私、この村のみんなが好きよ」

おばば様

「リーレ、お前はなんて可哀想な子だろうか。真実を話すのも酷、話さなかったことさえ、酷になるとは」

リーレ

「おばば様、私、可哀想なんかじゃないわ。みんなが好きよ。人間が好きよ……」

おばば様

「リーレ、お前なんて可哀想な子だろうか」

リーレ  
おば様  
大きな声

「私は可哀想なんかじゃないわ」  
「リーレ、お前は」  
「リーレ、逃げて！」

一度真っ暗になるが、すぐに明かりがつく。  
まだかなり早い、朝の頃。  
リーレ、椅子に座り眠っている。  
リーレ、ゆっくり目を開ける。

トメさん声  
リーレ  
メメさん声  
リーレ

「タマゴがウマレマシタワヨ〜！タマゴがウマレマシタワヨ〜！」  
「トメさんありがとう」  
「オスヨコセエ！ オスヨコセエ！」  
「メメさんそれは諦めて」

リーレ、庭へ向かう。  
陽はすっかりのぼり、正午。  
シキとメカ、登場。

シキ  
メカ  
リーレ声

「祝福の魔女アツカンパーネ〜！」  
「祝福の魔女アツカンパーネ〜！」  
「またベル鳴らさなかったわね」

リーレ、ケーキを持ち登場。

シキ  
リーレ  
メカ  
リーレ  
トメさん声  
メメさん声  
メカ  
シキ  
2人

「わあ〜！」  
「おめでとう、メカ」  
「へへへ、ありがとうアツカンパーネ」  
「卵の提供は庭にいる二羽の鶏からよ」  
「オメデトオオオ！」  
「ワカイツテ、イイワネエエ！」  
「トメさんメメさんありがとうな〜！」  
「アツカンパーネ、せえの」  
「ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデートゥーユー、ハッピーバースデートゥーユー、メカ。ハッピーバースデートゥーユー！」

拍手。

リーレ

「おめでとう」

シキ

「はい！ これ、プレゼント」

リーレ

「あらあ」

シキ、メカの似顔絵を描いたプレゼントを渡す。

メカ

「（受け取りながら）ありがとうございます、ずっと見えてたけど」

リーレ

「相変わず上手いわね。実物よりもイケメンじゃん」

メカ

「よく見ろそっくりじゃねえか」

青年登場。

青年

「こんにちは。あ、もう集まってきましたか」

リーレ

「来てくれてありがとう」

青年

「とんでもない、お招きいただきありがとうございます。メカくん、これプ

レゼント（とプレゼントを渡す）」

メカ

「嬉しそうに）えっマジかよ！（受け取り）花！」

青年

「やっぱり男が男に花って気持ち悪かったかな」

メカ

「家に飾るよ。ありがとう」

リーレ

「紅茶いれてくるから寛いでて」

青年

「ありがとうございます」

リーレ、退場。

シキ

「じゃあ私、ケーキ切るね」

青年

「危ないから僕がするよ」

メカ

「いいよ。シキ、切るの上手いから」

シキ

「うん。よくお店のお手伝いでしてるから大丈夫だよ」

青年

「そっか……。メカの持つ絵を見ている）え、肖像画かい？」

メカ

「シキからのプレゼントだよ」

青年

「ええ！？ シキちゃんが描いたの！？」

シキ

「そうだよ」

青年

「えっ、上手いな！？見せて見せて（とメカから受け取り）はあ、すごい。」

シキ

「シキちゃん、将来は肖像画家になれるよ」

シキ

「やだよお。人の顔ばっかり描くのつまんないもん」

メカ 「シキ、めっちゃめっちゃ絵が上手いんだぜ。オレ、シキの描く似顔絵よりいいものの、なんか、爆発してる感じの絵の方が好きだけど」

青年 「爆発」

シキ 「え、いつもの絵の方が好きなの？ ごめんね……」

メカ 「いやいやいや！ これはスゲー好き！ 最高！ いつもの絵より好き！」

青年 「良かったらまた今度、シキちゃんにインタビューさせてよ。是非絵も見せてほしいな」

シキ 「インタビュー！？ わあ、いいよ」

青年 「にしてもスゴいよなあ。もしかしてシキちゃんも魔女なのかもしれないね」

シキ 「祝福の魔女ラストノーツ！」

メカ 「お前別に祝福の魔女ではないだろ」

シキ 「じゃあ、何の魔女？」

メカ 「え？ う、うーん、じゃあ絵の魔女」

シキ 「かっこよくない……」

青年 「あれ？ そういえば、どうしてアツカンパーネさんって祝福の魔女なんだろう」

メカ 「ディーそんなんも知らないの？ 魔法って本当は祝福するからだよ」

青年 「ん？」

メカ 「えっとだから、オレたちは魔法って呼んでるけど、アツカンパーネからしたら祝福なんだって」

青年 「なるほど、そうなんだね。あとでアツカンパーネさんに聞いてみるよ」

メカ 「ぐう」

シキ 「ねえねえ、今度ディーの顔も描こうか？」

青年 「本当？ いいの？」

シキ 「うん」

メカ 「誕生日でもないのにあげるのかよお」

シキ 「だってえ」

青年 「じゃあ、お誕生日に描いてほしいな。実は来月なんだ」

メカ 「おっ、またケーキ食べれるな！」

シキ 「うん！」

青年 「うーん、ケーキは再来月かも。僕、3日後からしばらく王都に行くから」

メカ 「仕事？」

青年 「ううん、趣味。この村に魔女はアツカンパーネさんしかいないけど、王都にはたくさん住んでるんだって。だから、インタビューしに行くんだ」

シキ 「いいなあ」

メカ 「王都って遠いんだろ？」

青年

「まあね」

シキ

「寂しいね」

青年

「ありがとう。でもきつとすぐに帰ってくるよ」

リーレ、ティーポットとカップを盆にのせ戻ってくる。

リーレ

「切り分けありがとう」

シキ

「うん」

メカ

「なあ、デイーが明明後日から王都に行くんだって」

リーレ

「ああ、早速ですか」

青年

「ええ。思い立ったらウズウズしちゃって」

ベルが鳴る。

シキ

「お客さんかな」

メカ

「違うだろお」

リーレ

「はあい」

おばさん声

「リーレちゃん」

リーレ

「あ、おばさん」

おばさん

「あら、大人数ね」

リーレ

「はい」

「お裾分け、持ってきたわ。昨日の夜かなり作っちゃったの。良かったら食べてね」

リーレ

「ありがとう。みんなで食べるわ」

おばさん

「何かあればいつでも言ってね。それじゃ」

リーレ

「あ、良かったら一緒にどうですか？ ケーキ焼いたんです」

おばさん

「嬉しいけど、買い物があるから」

リーレ

「そうですか。それじゃあ、またの機会に」

おばさん

「ええ。それじゃあね」

おばさん、退場。

青年

「アツカンパーネさんって村の人から慕われてるんだね」

シキ

「祝福の魔女だもん」

メカ

「オレのお母さんも、よくリーレちゃんにはちゃんとしなさいねって言ってるぜ」

リーレ 「アンタ全然ちゃんとしてないじゃないの」

メカ 「まあな」

リーレ 「褒めてない。ケーキが足りなかったらこれ食べましょ」

シキ 「食べる〜」

リーレ 「先にケーキ食べちゃってよ」

青年 「すみません、アツカンパーネさんがもらったものなのに」

リーレ 「何言ってるんですか。私がもらったから遠慮することないんですよ」

リーレ、もらったパイを台所へ。

3人、会話しながら食事を続ける。

シキ 「アツカンパーネ、これ茶葉入ってないよお」

リーレ声 「えっ、うそお。ポット持ってきて」

シキ 「はあい」

シキ、台所へ。

メカ 「アツカンパーネ、オレ、ケーキよりパイがいい」

リーレ声 「アンタねえ。残りのケーキこっち持ってきてなさい」

メカ 「はあい」

青年 「あ、僕が持つていくよ。今日の主役なんだからゆっくりしてて」

メカ 「いいよ。自分のことは自分でしなさいってお母さんいつも言ってるんだ」

青年 「そっか。頼もしいね」

ゴーン、ゴーンと鐘がなる。

メカ 「あ。デイー、やっぱ持つてってくんない？ オレ庭に行ってくる」

青年 「庭？」

メカ 「トメさんとメメさんにご飯あげなきゃなんだ」

青年 「分かった」

リーレ声 「メカ、悪いんだけどトメさんとメメさんに」

メカ 「わかってる」

青年、メカ、それぞれ退場。

ガチャガチャと音。

青年声 「アツカンパーネさん」

リーレ声 「ありがとう」

4

数週間後。

賑わう村の広場。

リーレ、買い物かごを持ち、あくびをしながら登場。

おじさん 「眠たそうだねリーレちゃん」

リーレ 「昨日夜更かししちゃったの」

おじさん 「ハツハツハツ、若いねえ」

おじさん、退場。

子供、両手でヒヨコの死骸を包み、泣きながら登場。

リーレを通り越し退場しようとするが、リーレが後ろから声をかける。

リーレ 「どうしたの？」

子供 「あのねえ、ピヨがねえ、死んじゃったのお」

リーレ 「そうなの……。まだ小さいのにな……。」

子供 「だからね、生き返らせてって、祝福の魔女さんをお願いしたらいいよって  
お兄ちゃんが言ったの」

リーレ 「祝福の魔女さんでも、それは少し難しいと思うよ」

子供 「出来るってお兄ちゃん言ってたもおん」

リーレ 「ごめんね。でもね、ピヨちゃんは死んでしまったけど、今は天国で生まれ  
変わろうとしているのよ」

子供 「……？」

リーレ 「死ぬっていうのはね、ピヨちゃんの身体からね、ピヨちゃんのなかにあつ  
た、何て言うのかな、本当のピヨちゃんが抜け出しちゃった状態なの」

子供 「戻ってくるの？」

リーレ 「ううん、戻ってこれないの。でもね、今度は、このピヨちゃんの身体とは  
また違う身体で、ピヨちゃんは生まれて戻ってくるんだよ」

子供 「でも、身体が違うんだったら、ピヨって分からないよ」

リーレ 「分かるわ、大丈夫よ。目に見えなくても、きっと分かるよ」

子供 「なんで分かるの？」

リーレ 「目に見えないからこそ、分かるのよ。さあ、そのピヨちゃんの身体は、土  
に還してあげましょう。近くにお花があったら寂しくないわ」

子供 「ピヨの身体、埋めちゃうの？」

リーレ 「ええ。土のなかは暖かいから、死んだ身体はみんなそこで眠りたくなくなるんだよ」

子供 「じゃあ、ピヨの身体も土のなかで眠りたいのね……」

リーレ 「その花壇がちょうど良いわ」

子供 「うん。でも、お花さん萎れてるから、元気なお花さんのとこがいい」

リーレ 「そうね」

リーレ、目を閉じる。指を組む。

花が美しく返り咲く。

子供 「わあ。お姉ちゃん、祝福の魔女さんなの!？」

リーレ 「そうよ。祝福の魔女、アツカンパーネよ」

子供 「ねえ、ピヨに、また会える?」

リーレ 「すぐには見つからないと思うわ。うんと頑張って探してあげて」

子供 「うん」

リーレ、子供、土を掘り埋める。

リーレ 「次もヒヨコになるとは限らないの。牛かもしれないし、豚かもしれないし、猫かもしれない」

子供 「それでもピヨだったら嬉しいからいいの」

リーレ 「そうね」

埋め終わる。

リーレ 「ここはピヨちゃんのお墓だから、時々は会いに来て、祈ってあげてね」

子供 「このピヨの身体の中には、もうピヨいないの?」

リーレ 「この身体はね、ピヨちゃんがこの世界からはじめてもらった誕生日プレゼントなの。だから、このなかにはもうピヨちゃんがいなくても、これがピヨちゃんの大事なものに変わりはないから。ピヨちゃんの一部だと思っ、会いに来てあげて」

子供 「うん。私、毎日会いに来て、ピヨのために祈るよ」

リーレ 「それがいいわ。さあ、私もピヨちゃんのために祈りましょう。指を組んで、目を閉じて」

子供 「どうやって祈るの?」

リーレ 「ピヨちゃんを想って、好きなように」

2人、目を閉じ、祈る。  
どちらともなく目を開ける。

子供

「ありがとう祝福の魔女さん。私きつとピヨを探すね」

リーレ

「うん」

子供

「さようなら(と退場)」

リーレ

「さようなら」

浮浪児2人と泥棒少年が駆け足で登場。

走り去ろうとするが、盗んだ果物を落としてしまい慌てて拾う。

リーレと目が合い。

メテン

「あつ、祝福の魔女だ」

コージ

「可哀想な祝福の魔女だ」

リーレ

「可哀想？」

泥棒少年

「バカ、行くぞ！ あつ」

果物屋、登場。

果物屋

「こらガキ共！」

リーレ、慌てて祝福。

果物屋、派手に転ぶ。

泥棒少年、それを見て、自分が転んだときのことを思い出す。

泥棒少年

「あつ、もしかしてあの時の」

リーレ

「ねえ、可哀想ってどういうこと？」

果物屋

「(立ち上がり)このお」

リーレ、もう一度祝福。

果物屋、転ぶ。

リーレ

「私の書店に来て、こっちよ」

コージ

「どうする」

警察官のホイッスルが聞こえる。

泥棒少年

「行くぞ！」

リーレ、泥棒少年らを引き連れて退場。

果物屋、警察官がやってきてから、警察官と共にリーレらを追い退場。

アツカンパーネの書店。

メテン  
「うわ、本ばっかだよお」

リーレ  
「ねえ、可哀想って何のこと？」

コージ  
「それは(泥棒少年に口を押さえられ)ムググ」

泥棒少年  
「タダで教えてやれることなんて1つもねえな」

リーレ  
「それもそうね。ここにある本、好きなもの好きだけ持っていいわ」

泥棒少年  
「いらねえよ本なんか」

リーレ  
「えー、魔女の本だよ？ 本当にいらなの？」

「お前んとこの本、人気ねえだろ。魔女の本でも売れないもんはいらないね」

リーレ  
「ぐっ。よく知ってるわね」

泥棒少年  
「世の中渡るにゃ情報だかんな」

コージ  
「ウロウロしてると勝手に入ってくるだけだけどね」

泥棒少年  
「ちよっと黙ってるろ」

リーレ  
「じゃあやっぱり食べ物ね。パスタはいかが？」

メテン  
「わあ、パスタ食べたい。なあ、いいだろグロツテ」

泥棒少年  
「仕方ねえなあ」

リーレ  
「それで、可哀想って何？」

「ほんとは詳しくは知らないんだ。村長たちの話が、たまたま少し耳に入っただけで」

コージ  
「お前、売られるよ」

リーレ  
「(笑って)何を。私が、何に？ どこへ？」

泥棒少年  
「村に、王都へ」

リーレ  
「うっ、吐き気が」

泥棒少年  
「それは嘔吐」

リーレ  
「聞こえるか、もしもし」

メテン  
「分かった！ 応答せよだ！」

コージ  
「やるなあ祝福の魔女」

リーレ  
「どうも」

泥棒少年  
「遊んでる場合かよ。お前売られるってんだろ」

リーレ 「本当に王都へ？」

コージ 「聞いた話だとな」

リーレ 「本当に私が？」

メテン 「聞いた話だとねえ」

リーレ 「なぜ？」

泥棒少年 「さあ。これでまた持ち直せるって村長は言ってたけど、それ以上はわかんねえな」

リーレ 「……」

シキ 「祝福の魔女アツカンパーネー！」

メカ 「祝福の魔女アツカンパーネー！」

泥棒少年 「あ」

メカ 「あれ、なんでグロッテたちがここに？」

泥棒少年 「ちょっとな」

シキ 「あつ、買い物？」

泥棒少年 「違うよ。祝福の魔女にご飯作ってもらおう約束してんの」

メテン 「パスタ〜！」

シキ 「わあ、私も〜！ アツカンパーネ、私も食べていい？」

メカ 「アツカンパーネ？」

リーレ 「ううん。パスタね、作ってくるから、ちょっと待ってて」

リーレ、退場。

シキ 「なんか変だよな。デイーが王都にいったの、寂しくなってきたのかな……」

メカ 「違うだろうお、あと2週間で帰ってくる予定だしさ」

シキ 「ねえグロッテ、何かあったの？」

泥棒少年 「え、あ、いや……」

メテン 「さっき祝福の魔女が(口を押さえられ)ムググ」

泥棒少年 「腹へってたんじゃね？」

シキ 「そうかも」

メカ 「少しは疑えよ」

コージ 「デリケートな話なんだ。聞くなら祝福の魔女に直接聞けよ」

シキ 「デリケート？」

メカ 「聞かれたくないってことだろ」

シキ 「じゃあ聞いちゃよくないね……」

メカ 「まあ、遠慮した方がいいかもな」

泥棒少年

「(メカに)お前の母ちゃん元気？」

メカ

「ん、おう」

泥棒少年

「この前は匿ってくれてサンキューって、またお礼言っといってくれよ」

メカ

「分かった。あんま無茶すんなよ」

泥棒少年

「わーってるけど、無茶しないと生きてけねえの」

メカ

「……そっか。ごめんな」

泥棒少年

「なんでお前が謝んだよ」

メカ

「なんとなく」

リーレ声

「シキ。手伝って」

シキ

「あ、うん」

シキ、台所へ。

メカ、やや声をひそめて。

メカ

「なあ、結局どうしたんだよ」

メテン

「なにが？」

メカ

「アツカンパーネだよ」

泥棒少年

「ああ……」

コージ

「俺らがちらつと聞いた話を少ししただけだよ。祝福の魔女、王都に売られるらしい」

メカ

「売られる……？ 売られるって、どうして？」

コージ

「知らないよ。魔女だから使い道なんてたくさんあるんだろ」

メカ

「ねえよ。アツカンパーネ、大したこと出来ねえ魔女だもん」

メテン

「村長、これでまた持ち直せるとも言ってたよお」

メカ

「なんだよ、持ち直せるって……」

泥棒少年

「今かなり金ないだろ、この村。オレらもしっかり聞いたわけじゃないからさ、それ以上詳しくはわかんないぜ」

メカ

「なあ、また持ち直せるって、おかしくないか？」

メテン

「何が？」

メカ

「またって村長言ったんだろ？ それって、前にもあったってことになるんじゃないの？」

コージ

「え。まあ、そうかも」

泥棒少年

「貧乏な村だし、あってもおかしくねえだろお」

メカ

「じゃあ、そのとき持ち直せたのは、何でなんだよ」

泥棒少年

「んなもん知らねえよ」

メテン

「その時も魔女を売ったんじゃないの？」

コージ 「かもなあ」

メカ 「……(考え込んでいる)」

泥棒少年 「どうした？」

メカ 「オレのお母さんが……祝福の魔女アツカンパーネは村の救世主だから、リ  
ーレちゃんにはちゃんとしなさいって言うんだ……」

泥棒少年 「は？」

メカ 「俺、ずっと、お母さんが言う祝福の魔女アツカンパーネは、アツカンパー  
ネのことだと思ってたんだ」

メテン 「え？ そうでしょ？」

コージ 「何言ってるんだ？」

泥棒少年 「さあ……」

メカ 「おかしいと思ってたんだ、みんなアツカンパーネのこと、リーレとか、リ

泥棒少年 ーレちゃんって呼ぶのに、祝福の魔女アツカンパーネって言ってるから」

コージ 「メカ、お前言ってること結構しっちゃかめっちゃかだぞ」

泥棒少年 「メカだけに」

メカ 「オレ、ちょっと家帰る！」

メテン 「え、パスタ食べないの？」

メカ、駆け足で退場。

メテン 「(大声でメカに)パスタだよお」

リーレ声 「さすがにまだ出来ないわよお」

メテン 「あ、うん。メカ、パスタ食べなくて良いのかな」

コージ 「あいつには家あるんだし、そこまで食べ物にも困ってないって」

メテン 「そっか」

ベルが鳴る。

コージ 「あれ、戻ってきた？」

メテン 「やっぱりパスタが食べたくなったんだよ」

青年 「アツカンパーネさん！」

と、息を切らして青年が飛び込んでくる。

メテン  
泥棒少年 「メカじゃない」  
青年 「誰だお前」  
「え、誰？」  
「はあい(と出てくる)えっ、ディーさん!？」  
青年 「あっ、アツカンパーネさん」  
「もう帰ってきたの!？」  
「あ、今バスタ出来たんですけど」  
「アツカンパーネさん、まずいです! 悪魔祓いがこの村に向かっています!」  
「え、あ、悪魔……?」  
「なんだよこいつ」  
「頭イカれてんじゃないのか」  
青年 「(2人のセリフに被せて良い)悪魔祓い、ああ、そりゃ困惑するよな。あの、アツカンパーネさん、魔女ってどのくらいいると思います?」  
「え? そ、そんな急に言われても、この村以外の魔女なんて知らないわ」  
青年 「ほとんどゼロです。アツカンパーネさん、この国でもう魔女はあなたしかいません」  
「ゼロ……? いくらなんでもそんなこと」  
「あるんですよ。魔女、いや、正確には魔女だって堂々と名乗っているのは、まずアツカンパーネさんだけなんです」  
「みなさん謙虚なのね」  
「アツカンパーネ見栄張りだもんね」  
「失礼ね」  
青年 「名乗れば殺されるんですよ」  
「は?」  
「悪魔祓いに」  
「どうして?」  
青年 「王都に行つてはじめて知りました。この国では大規模な魔女狩りが行われていきます」  
シキ 「魔女……?」  
泥棒少年 「おいおい……」  
「か、狩るって何?」  
青年 「魔女は邪悪な悪魔と契約した人間という話になっているみたいなんです。魔女と分かれば、いえ、少しでも怪しまれただけで……火炙りにされると」  
「火……!?!? そんな」  
シキ 「アツカンパーネ、殺されるの? アツカンパーネ、死んじゃうの?」  
「大丈夫よ」  
「アツカンパーネ、殺されるの? アツカンパーネ、死んじゃうの?」  
「大丈夫よ」

シキ

「大丈夫じゃないんでしょ？ だからディー、こんなに早く戻ってきたんでしょ？ やだよお、アツカンパーネ死んじゃやだよお」

泥棒少年

「シキ」

メテン

「でも、ずっと祝福の魔女は魔女だって言って普通に生きてきたじゃん。今さらバレちゃったってことなの？」

コージ

「あ、それが売られたってことなのかも」

青年

「売られた？」

泥棒少年

「村長たちが話してるのチラツと聞いたんだよ」

青年

「そうか、だとしたら合点がいく」

リーレ

「え？」

青年

「魔女を王都に差し出せば褒美が出るそうです。それが魔術を使える正真正銘の魔女であれば尚更」

泥棒少年

「えげつ……」

メテン

「じゃあ、祝福の魔女は殺されるために売られたの？」

青年

「……そうなるね」

リーレ

「笑ってまさか。だって、ねえ。村長がそんなことしたら、村のみんなが黙ってないもん。ねえ、そうじゃない？」

沈黙。

リーレ

「ちよっと、何か言ってみてよ。ねえ、自分で言うのも恥ずかしいけど、だってみんな私のこと好きじゃない？ 私、本当に好かれてるんだよ」

メカ

〔登場と共に〕違うよアツカンパーネ

リーレ

「あれ、アンタどこ行ってたの」

メカ

「お前のお母さん、何で死んだか知ってる？」

リーレ

「え？ そんなの今関係ないじゃん……」

メカ

「あるよ。お前のお母さん、村に売られて死んだんだもん……」

リーレ

「……どういふこと？」

メカ

「村に、金がなくて、それで魔女を王都に差し出せば金になるって、それで大人みんな、決めただって」

リーレ

「……な、なに言ってる」

メカ

「アツカンパーネのお母さんなんだよ。オレのお母さんも、シキのお母さんも、大人はみんな知ってたんだよ。こんなことってないよ……お母さん……」

リーレ

「……オレに謝ったって、うう……」

メカ

「うそよ、私のお母さんは私を産んだと同時に死んだのよ」

メカ

〔泣いている〕

シキ 「泣いている」

青年 「身を隠しましょう、今すぐ荷物をまとめて村を出るんです」

リーレ 「そんな、どこに行けって言うの」

青年 「わかりません。でもここにいるのはマズい」

リーレ 「この店を置いていけない」

青年 「言ってる場合ですか」

ベルが鳴る。

おばさん声 「リーレちゃん」

ベルが鳴る。

おじさん声 「リーレちゃん、ちよおつといいかい」

リーレ 「どっどうかされましたか」

村長声 「入っても良いかい？」

全員、顔を見合わせる。

青年が頷く。

リーレ 「ええ、どうぞ」

村長 「おや、ずいぶんと賑やかだねえ」

リーレ 「ええ」

村長 「いやあ、大した用事じゃなくて悪いんだけどねえ。私の大事にしていた花が枯れかけてしまっただけねえ、リーレちゃん、魔法で何とかできないかい」

おばさん 「それくらい、お手の物よねえ。リーレちゃん、よく花壇のお花、元気にしてくれているじゃない？」

リーレ 「ええ……」

村長 「ちよつと役場まで来てもらえないかな？ ああ、役場もね、今お客さんが多いんだけど、気にしないで入ってきてくれたら良いから」

リーレ 「お客さんって王都からの使いですか」

村長 「ん？」

リーレ 「悪魔被いですか！」

沈黙。

おじさん 「リーレちゃん、村のためだと思ってくれないか」

リーレ 「……は？」

おばさん 「リーレちゃんのお母さんもね、志願してくれたのよ。村のためよ」

リーレ 「嘘よ」

おばさん 「嘘じゃないわ、残されたリーレちゃんがこの村でちゃんとして生きていけるようにって、お母さんがね。だからね、私たち、敬意を表して祝福の魔女って呼ぶことにしたの。ね、私たち、リーレちゃんのお母さんにすっごく感謝してるのよ」

村長 「こんなことを頼むのはおかしいと十分わかっているが、もうこうでもしないと村は潰れるんだ。頼む。この通りだ」

おじさん 「君たち魔女は、死んでもなおまた自分として生まれ変わるそうじゃないかな、人生の1つをこんな形で終わらせてしまうのは悲しいだろうが、村のためだと思ってくれないか。村を救うための犠牲だと思えば、次の人生も楽しいんじゃないかな」

リーレ 「うそだ、そんなわけない」

おじさん 「リーレちゃん」

おばさん 「リーレちゃん」

村長 「リーレちゃん」

シキ 「やめてよ！ やめてよ！」

おばさん 「シキちゃんもこのままだと食べるものがなくなるのよ。さ、一緒にリーレちゃんにお願いして」

シキ 「いやだ、アツカンパーネ死んじゃだよ」

おじさん 「大丈夫だよ、リーレちゃんには次の人生があるんだよ」

リーレ 「ない、ないわよそんなもの！ 魔女は火と共に死ねば二度と生まれ変わらないのよ！ 魂が消滅するの！」

村長 「そうなのかい。じゃあ、火炙り以外の方法で殺してもらおうよう、私から悪魔被いのみなさんに頼むから、ね。リーレちゃん、分かってくれるよね？」

おばさん 「祝福の魔女だものね」

おじさん 「村に祝福をもたらしてくれ」

村長 「祝福の魔女アツカンパーネ」

リーレ 「うわあああああああ……！」

リーレ、発狂しながら退場。

おばさん 「リーレちゃん！」

シキ 「アツカンパーネ！（と追いかける）」

メカ 「シキー(とシキとほぼ同時に追いかける)」  
おじさん 「どうする」

村長 「村人総出で探そう」  
泥棒少年 「オレらも行くぞ」

泥棒少年、メテン、コージ、退場。

青年 「おかいしよアンタ達。どうして平気で頼めるんだ！ あんなことが！」  
おばさん 「私たちだって平気じゃないわ」  
おじさん 「苦渋の決断なんだ」

村長 「君も分かるだろう。村にはお金が必要なんだ」  
青年 「だからってこんな酷い仕打ちがあるもんか！」

村長 「酷い？ 魔女を差し出さなければ村人全員がもっと酷いことになるんだぞ。全員が家を失い日々の生活に困るんだ。いいか、お前が今そうして生きていられるのは、あの子の母親、祝福の魔女の犠牲があったからなんだぞ。何も知らずにのうのうと生きているだけのお前に酷いと言う筋があるのか、よく考えてみるんだな」

村長、おばさん、おじさん、退場。  
取り残された青年、頭を抱えたりと苦しむ。

青年 「くそ、くそ、くそ……！」

青年、退場。

場所は村の広場。  
スコップなどの武器を持った村人(大人)が全員でリーレを探している。

村人 「祝福の魔女を見つけたら言うんだよ」  
村の子供 「うん」

シキ、メカ、登場。

シキ 「メカ、どうしよう」  
メカ 「アツカンパーネ、どこ行っちゃったんだよ……」

悪魔祓いたち登場。

悪魔祓い1

「魔女はどこだ？」

悪魔祓い2

「早くお探さない。こうしている間にも、悪魔の力は強まっているのですよ」

村長、登場。

村長

「すみません、あと一步のところだったのですが」

悪魔祓い3

「仕方のないことですよ。魔女はあなた方人間が対処できる相手ではありませんから」

村長

「はあ、はあ。そうですね。いやあ、まさか彼女が魔女だったとは。どうにも上手く隠していたようで、最近まででんでん気付きましたよ」

悪魔祓い1

「そうだろうな。魔女は正体を隠すのが上手いのだ」

村長

「はあ、はあ。そんなんですね。あの、ところで、今回の、そのう、いただける報酬というのは」

悪魔祓い1

「案ずるな、用意してあるとも」

悪魔祓い1、3に目配せをして、村長に1枚の羊皮紙を渡す。

村長が羊皮紙を受けとると同時に泥棒少年、メテン、コージが登場。

泥棒少年

「メカ」

メカ

「おう。なあ、アツカンパーネ探すの手伝ってくれ」

メテン

「いいよ。パスタ食べれなくなっちゃうしね」

コージ

「じゃ、オレらはあっち」

泥棒少年、メテン、コージ、退場。

シキ、メカも3人とは反対側に退場しようとするが。

村長

「まっ待ってください！ お話いただいていた額の半分というのは、どうしてまた」

メカ、シキ、村長の叫びを聞いて立ち止まる。

悪魔祓い1

「どうにも長きに渡り魔女を匿っていた疑いがあるのでな。そのように減額処置をとらせてもらったぞ」

村長 「そんなことはありません。魔女だと知ったのはつい最近なのです」

悪魔祓い2 「疑わしいのはいけないことですわ。清廉潔白ならば疑われる余地などないはずですからねえ」

悪魔祓い3 「火のないところに煙は立たないのですよ村長さん。減額だけで済ませたことをもっと感謝していただきたい」

村長 「そんな、それでは村が」

近くにいた村人、次々と声をあげる。

村人 「村はどうなるんですか!」

村人 「私の子供はどうすれば良いの! まだ幼いのにあんまりよ!」

村人 「結婚したばかりなんだ! これからなんだよ!」

村人が声をあげている隙に変装したリールレが登場。  
リールレ、舞台の端で騒動を見ている。

村人 「悪魔祓い様、魔女は魔術を使う本物の魔女なんです! 減額とはあんまりではありませんか」

村人 「そうですね、危険をおかしてあなた方にお知らせいたしましたのです。減額というのはあんまりです」

悪魔祓い1 「ならば魔女をもう1匹見つければ良い」

村人 「もう1人?」

悪魔祓い2 「そんな」  
「もう1匹くらいいるでしょうとも。この村はどうも魔女が住みやすそうですわ」

悪魔祓い3 「火のないところに煙は立たない! 疑わしいものに心当たりは? 火のないところに煙は立たないのです!」

村人、ぎわぎわしている。

シキ 「ひ、ひどい……」

メカ 「行こう。あいつきつと1人で怯える」

村人 「(シキを見て)あっ」

シキ 「え?」

悪魔祓い1 「どうした」

村人 「い、いえ……」

悪魔祓い3

「どうしたのです？ もしやあなたが魔女なのですか？」

村人

「い、いえ、あの子供が」

シキ

「私……？」

悪魔祓い2

「あの子供が？」

メカ

「なんだよ」

村人

「確か異常に、絵が上手かったと思ひまして」

シキ

「わたしの絵……？」

メカ

「なんだよ、ただの特技だろうが」

村人

「そういえば気味の悪い絵ばかりを描いてるような」

村人

「人物を描けばまるで魂を紙に閉じ込めたように詳細だし」

メカ

「うるせえ！ ただの特技だつてんだろうが！」

悪魔祓い1

「なるほど。悪魔を召喚する術として絵を媒介にしているのかもしれないな」

悪魔祓い2

「いらっしやい、絵を描いてみせてちょうだい。さあ(とシキの腕を引っ張

ろうとする)」

メカ

「やめろ！ シキは魔女じゃねえ！」

悪魔祓い1

「邪魔をするな！(とメカを叩く)」

メカ

「わあ！(と転ぶ)」

悪魔祓い2

「来なさい！(とシキの腕を引っ張る)」

シキ

「いや！」

リーレ

「やめて！」

リーレが叫ぶと同時に悪魔祓い2が呻き声を上げて倒れる。  
村人、悲鳴。

悪魔祓い1

「どうした！」

悪魔祓い3

「(脈を確認して)死んでいます」

悪魔祓い1

「なんだと(リーレを見て)貴様か！ 邪悪な魔女め！」

リーレ

「違う！ あなたたちの方がよっぽど邪悪よ！」

悪魔祓い1

「人を殺して何を言うか魔女！」

リーレ

「あなたたちも人を殺すわ！ わたしを殺すんでしょ！」

悪魔祓い3

「魔女は人ではない！ 邪悪そのものだ！」

リーレ

「なぜ！ 普通に生きていただけだよ！ あなたたちと同じように生きてる

だけよ！」

悪魔祓い1

「魔術を使う者が何を言うか！」

悪魔祓い3

「全員でかかれ！ 殺して構わん！」

メカ

「やめろ！ やめろよ！」

リーレ

「村人に）どうして！生きてただけなのに！ 私のお母さんにも同じことをしたの！ ねえ！ ずっと黙ってたの！」

村人、雄叫びを上げならリーレへと向かって行く。  
舞台上に青年が駆け足で登場。

青年

「アツカンパーネさん」

リーレ

「ほとんど被せて）どうして！」

舞台、暗くなる。

そのなかで悪魔祓いや村人たちの悲鳴が聞こえる。

まさに阿鼻叫喚。

つぎに明かりがついたときには、悪魔祓いも村人も全員死んで舞台上に転がっている。

残っているのはリーレ、シキ、メカの3人。

メカ

「アツカンパーネ」

リーレ、メカの声に顔を上げ、ふらふらと近寄る。

2人、びくっと反応し、身体を強ばらせる。

メカ、舞台の端に転がる青年を見て。

メカ

「ディー」

リーレ、振り返って青年の死体を見る。

リーレ

「そんな、そんな、ディーさん」

シキ

「ディー、ディーが死んじゃったよお」

リーレ

「シキ（と近寄ろうとして）」

シキ

「やだあああ（と逃げようとするが立てない）」

リーレ

「シキ」

シキとリーレの間に立ちふさがっているメカ。

リーレ

「メカ」

メカ

「アツカンパーネ」

リーレ 「ねえ、分かって……」

リーレ、2人が自分をひどく恐れていることに気がつく。

リーレ 「やめてよ。そんな顔しないでよ！」

2人、ますます怯える。

シキ 「来ないでえ」

メカ 「アツカンパーネ、アツカンパーネと、ほとんど泣いている」

リーレ 「どうして、どうしてよお。どうして泣くの、あああ、あああああああ」

舞台、暗くなる。

リーレの絶叫。

シキとメカの泣き声が止まる。

明かりがついたときにはリーレだけが立ち、ふたりは死んでいる。

うつむいていた顔をあげるリーレ。

舞台、再び暗くなる。

【二部へ続く】

喫茶店。客もそこそこおり、賑わっている。  
ノートパソコンとにらめっこをしている女客。

サトー 「終わったの？(パソコンから目を離さず)」

シマダ 「飽きた」

サトー 「言ってる場合じゃないっしょ」

シマダ 「飽きた」

サトー 「進捗は」

シマダ 「2分の1」

サトー 「おー、半分終わった」

シマダ 「休憩するわ」

サトー 「それで間に合わなくなっても知らんぞ」

シマダ 「なんか、いける気がする」

サトー 「いいけど……」

シマダ 「すまん、メニュー取って」

サトー 「(メニュー渡しながら)お腹いっぱいなんじゃないの」

シマダ 「だから見るだけ」

サトー 「そう」

学生服を着たリーレが登場。

女店員 「いらっしやいませー」

店員、すぐにリーレに駆け寄り。

女店員 「1名様ですか？」

リーレ 「はい」

女店員 「ご案内します。こちらどうぞ」

リーレ、店員に案内され席へ。

女店員 「お水はセルフサービスです」

リーレ 「(頷く)」

女店員 「あちらにありますんで。ごゆっくりどうぞ」

リーレ、店員が去った後、鞆から教科書やノートや筆記用具を取り出し机

に広げる。

勉強するらしい。

その後メニューを取り、しばらく眺める。

女客の会話は店員のセリフが終わり次第すぐにしてほしい。

シマダ 「そっち終わりそう？」

サトー 「あーうん。っていうか私は元々そんなに期限ヤバくない」

シマダ 「あ、そうなの。このあとどうする？」

サトー 「脚本の続きは？」

シマダ 「今日はもう書けんわ。え、そっちまだレポート書く？」

サトー 「あー。じゃあ終わり見えてきたしいいかな、今日は」

シマダ 「どっか行こ」

サトー 「アバウト」

シマダ 「あとそんなに金はない」

サトー 「えー、映画でも観る？」

シマダ 「このへん映画館ある？」

サトー 「駅前のバス停んところ」

シマダ 「ああ、あれ映画館か。今観たいのある？」

サトー 「ないけど、なんか。今何やってるっけ」

シマダ 「えー」

リーレが呼び出しボタンを押す。

女店員 「おまたせしました」

リーレ 「これ(とメニュー表を指して)」

女店員 「メロンフロートですね、かしこまりました。しばらくお待ちください」

リーレ、メニューを戻す。

教科書とノートを広げ勉強し始める。

客の声。

シマダ 「ホラーっていった？」

サトー 「テレビで見るならいける」

シマダ 「一緒じゃね？」

サトー 「スクリーンだとおっきいから怖さ増すじゃん」

シマダ 「あーちょっと分かる」

リーレと同じ制服を着た学生2人が会話をしながら登場。

学生2 「は？ ザゴじゃんそいつ」

学生1 「とりま明日また絞めるわー」

学生2 「クソワロ」

女店員 「いらっしやいませ」

学生1 「2人」

女店員 「かしこまりました。こちらどうぞ」

学生2人、会話しながら席へ。

女店員 「お水はセルフサービスです。ごゆっくりどうぞ」

学生2 「はーい」

と、学生2携帯を触りながら返事。

サトー 「これどう？」

シマダ 「へー、めっちゃファンタジーっぽい」

サトー 「なんか厄？ の魔女の話だって」

シマダ 「えっ、ユウキくん出てんじゃん。これにしょ」

サトー 「だろうなとは思った」

シマダ 「めっちゃ好き。ほんとね……好き」

サトー 「知ってる」

シマダ 「何役？」

サトー 「名前書いてないけど記者の青年だって」

シマダ 「ふうん。時間は？」

サトー 「あーっと、次の回が30分後」

シマダ 「3分後ぐらいに出たらちようどぐらい？」

サトー 「3分。まあ、ぐらいかな」

シマダ 「じゃあちよつと映画のレビュー漁るわ。サトーちゃんレポートの続き？」

サトー 「3分じゃ書けないけどなあ」

女客2人、それぞれパソコンに意識を向ける。

学生1 「決まったんだけどお」  
学生2 「え、まじ？」  
学生1 「お前携帯ばっか見てんなよ」  
学生2 「すぐ決めるわ」  
学生1 「っていうかお冷や来んの遅くね？ 仕事放棄じゃん」  
学生2 「なんか、セルフだって」  
学生1 「は？ 聞いてないんですけど」  
学生2 「言ってた言ってた」  
学生1 「聞いてねー」

学生1、携帯を触る。学生2はメニューを見ている。

シマダ 「結構暗いけど、一応光はある終わり方っぽい」  
サトー 「それネタバレでは？」  
シマダ 「いや、人によって受け方変わるって」  
サトー 「おっ、いいですねあ」  
シマダ 「とにかくユウキくんが可愛いらしい」  
サトー 「可愛いのか」  
シマダ 「うーん(とパソコンを見ながら)」  
学生2 「オツケ。呼ぶわ」  
学生1 「ん」

学生2、呼び出しボタンを押す。

男店員 「お待ちせしました」  
学生2 「えーっとお、これで」  
学生1 「あ、私もそれ。まじ奇跡じゃん」  
男店員 「ではカルボナーラお2つで宜しいですか？」  
学生2 「はーい」  
男店員 「かしこまりました。少々おまちください」  
学生2 「はーい。(店員行ってから)今の人ちょっとイケメンじゃなかった？」  
学生1 「え、趣味悪くない？」  
学生2 「ひどー」  
学生1 「お前そんなんだから陰キャとか言われんだろ(あくまで冗談っぽく)」  
学生2 「言われてないんですけど」  
学生1 「あ、ってか今日のあいつめっちゃウザくなかった？」

学生2 「誰？」

学生1 「え、ヤバー、名前出てこないんですけど」

学生2 「ワロ。興味無さすぎ」

学生1 「窓側の陰キャ。なんかもう見てるだけでイラっとすんだよね」

学生2 「えー」

学生1 「入学したばっかのときもさあ、親切で声かけたら結構ですみたいなの？

私友達とかいららないみたいなの目で睨んでくんのチョーウザかったんですけど」

学生2 「あっ、あの私人間嫌いなので、みたいな目してる子じゃね？」

学生1 「そうそう！ まじで痛すぎワロ」

学生2 「ヤバ、私も名前わかんない」

学生1 「陰キャちゃんでおツケーっしょ」

シマダ 「(レビューを見て)はー。何この悪口許んですけど」

学生1 「勘違いして)あんだよババア」

シマダ 「え？(サトーに)私？」

サトー 「驚くほど奇跡的に最悪なタイミングだったよ今」

学生1 「直接言う度胸ないなら黙っててくれませんかあー鬱陶しいんで」

シマダ 「(キレて)は？ お前らもぐちぐちぐちぐち頭悪そうな悪口ばっか言ってたけど本人にそれ伝えてんの？ 直接言う度胸ないなら黙ってればー鬱陶しいんで」

サトー 「聞いてたんかい」

学生1 「何ババアめっちゃイキッてんじゃん」

シマダ 「(舌打ちしてから)サトーちゃん時間は？」

サトー 「うーん。3分後」

シマダ 「(ため息とか悶えとか)行こっか」

学生1 「え、結局逃げんじゃんワロ」

シマダ 「どーも、私忙しいんで。(サトーに)こいついつか脚本にするわ」

女客2人、退場。

学生1 「アイツあのあと死んでくんないかなー」

学生2 「まじそれな」

女店員 「すみませんお客様。大変長らくお待たせいたしました」

リーレ 「(頷く)」

学生1 「あ、まじかよ」

学生2 「え？」

学生1 「陰キャちゃんいるんですけど」

学生2 「ヤバ、絶対聞かれてたじゃん」

学生1 「盗み聞きするほうが悪くね？ってかこれで学校来なくなってくれたら最高なんですけど」

学生2 「まじそれ」

学生1 「(話題が変わり)つつーか、私留年するかもらしいんだけどさあ」

学生2 「えー」

学生1 「え。ヤバくないの？」

学生2 「え、うん。いけるっぼ(ぼい、の略)」

学生1 「はー裏切りー。一緒に留年しようよマジで」

学生2 「ヤなんですけど。今から頑張れって感じ」

学生1 「無理み強すぎ。あー死にたー」

学生2 「ワロ、葬式行くわ」

リーレ、その言葉を聞いて、机の上で肘をつき指を組む。

学生1 「お前葬式で絶対笑ってんじゃない……」

学生1、心臓の痛みを覚える。

学生1が心臓を押さえて苦しんでいるときに学生2は「どうしたの？」や「え、何？」などの声かけを。

心臓がはげしく痛む。

学生1、うめき声と共に床へと倒れてしまう。

騒がしくなる店内。

学生2 「きゃああああ！ りいぼん、りいぼん！」

男店員 「(駆けつけて)お客様！(厨房方向へ)救急車！」

女店員声 「はい！」

学生2 「どうしたの！ ねえ！ りいぼん！ ねえ！」

男店員 「あまり揺すらないで！」

リーレ、何でもないようにメロンフロートを完食してから、荷物をまとめ退場。

本を山盛りに詰めた段ボール箱を抱え青年が登場。  
図書館を目指し歩いていけるうしろに少年が登場。

少年1 「お前いけよ」

少年2 「ええ、皆で行こうよお」

少年1 「いちいち女々しいんだよ」

少年3 「もー、オレがいくよ。(青年に)すみませーん」

青年 「はい」

少年3 「あの、ボール取ってもらえませんか。塀の上に乗っちゃったんです」

青年 「お、いいよ」

少年3 「ありがとうございます」

少年1・2 「ありがとうございます!」

青年 「どこ?」

少年3 「そこです」

青年、持っていた段ボールを近くのベンチに置き少年たちと退場。  
そこにリーレが登場。広場を通り過ぎようとしている。

青年声 「あー、ちょっと高いねー」

少年2声 「取れる?」

青年声 「行ける行ける。任せて」

少年3声 「すみません」

青年声 「いいっていいって。ふん、ふん、ほっ」

と、青年が塀上のボールと格闘する息。

リーレ、青年の段ボールが置かれたベンチの前を通り過ぎる。

ちらりと視界に入ったときに、一番上に乗っている本が気になる。

随分古い本のようにだ。

リーレ、思わず手に取る。

捲ってそのまま読んでいる。

青年声 「ぎゃあ!」

ドスン! と重たい音。

コロコロとリーレの足元に野球ボールが転がってくる。

少年1声 「うわあ、大丈夫かよ！」  
少年2声 「死なないで〜！」  
少年3声 「すみませんすみません頼んでしまったばかりに」  
青年声 「いったー。いや、大丈夫。それよりボールは」

リーレ、ボールに気がつき、本のページを指で挟んだまま、もう片方の手でボールを拾う。

青年 「あ」  
リーレ 「これですか」  
青年 「ありがとうございます。(少年たちに)あつたぞお」  
少年3 「ありがとうございます。背中、大丈夫ですか」  
青年 「あれぐらい平気だって。気にせず遊んできな」  
少年2 「うん。ばいばい」  
少年1 「行こうぜ。(青年に)あんがとー!」

少年ら、退場。  
遠くから救急車の音が近付いていき、通り過ぎていく。

青年 「ねえ、その本」  
リーレ 「え。あ、すみません(と本を段ボールの上に戻す)」  
青年 「いや。読めるの? 結構珍しい言語なんだけど」  
リーレ 「え。ええ。いや、全然」  
青年 「そっか」  
リーレ 「随分古かったんで」  
青年 「ああ、なるほどね。この本、その図書館に寄贈するものなんだけど、これだけは違くて。興味あるならオレが翻訳したのと一緒にコピーして渡そうか?」  
リーレ 「いえ。本、嫌いなんで」  
青年 「そうなの? じゃあ、もしやっぱり読みたくなったら来てよ。オレ、その図書館で働いてるから」  
リーレ 「あ、はい。まあ……」  
青年 「魔女にインタビューした内容を本にまとめたっていう、まあフィクションだけどさ。結構面白いから」  
リーレ 「……(頷く)」  
青年 「それじゃあ」

青年、退場。

リーレ 「あ、あの！」

と、青年を追いかけて退場。  
図書館。

青年声 「5分ぐらいで出来ると思うから」

と、言いながら青年とリーレが舞台に登場。

リーレ 「分かりました」

青年 「魔女に興味があるならこの辺りの棚かな。あ、その椅子は上の本を取る  
ときのね。靴は脱いでって言わなくても分かるか」

リーレ 「(本棚の分類を見て)宗教」

青年 「になるみたいだね。ファンタジーの方が良かった？」

リーレ 「いえ。本、嫌いなんです……」

青年 「言ってたね。あっちの児童書コーナーを抜けた先に読書のスペースがあ  
るから、座って待ってて」

リーレ 「はい」

青年 「OK」

青年、退場。

リーレ、本棚を眺めながらゆっくり歩く。背表紙を撫でたりしている。

リーレ、椅子を引きずってもってきて、座る。

ぼうつとしている。

目を閉じる。

沈黙。

電話が鳴る。

リーレ、慌てて携帯を取り出す。

リーレ 「はい。……ああ、うん……。うん、いくらか入ってる。1ヶ月分でない  
の？ うん……。あ、それだとお金足りないかも。黒縄先生でしょ、分か  
ってる、うん。それじゃあ」

リーレ、通話を切ってから財布を取り出し中身を確認。

再び椅子へ。

椅子に背中を預け、目を閉じぼうつとしている。

青年、紙の束を抱えて登場。

青年、一瞬リーレを見て驚き立ち止まる。

青年 「面白いところに座ってるね」

リーレ 「あ(と立ち上がる)」

青年 「お待たせ。えっと、こっちが本のコピーで、こっち翻訳ね」

リーレ 「ありがとう」

青年 「ねえ、これ本当に全然読めなかったの？」

リーレ 「え？」

青年 「あ、ごめんね変なこと聞いて。児童書コーナーは見た？」

リーレ 「いえ。ずっとここにいたので」

青年 「そっか。フフフ、それは残念だな」

リーレ 「あの、私本は読まないの」

青年 「ああ、本じゃなくて、その、ちょっと変わった子がいてさ。いつもこの時間にいるんだけど」

リーレ 「はあ」

青年 「悪口とかじゃないんだよ。本を読みながら、児童書コーナーをね、ずっと、こう、難しい顔をしてうろうろしてるんだよ」

リーレ 「本を読みながら、ですか」

青年 「人がいないから注意しないけどね、可愛いし。あつ、ロリコンとかじゃないから！」

リーレ 「はあ」

青年 「どちらかというと年上好きだから、大丈夫だから」

リーレ 「はあ(何を聞かされているんだ)」

青年 「あつ、そそそれじゃあオレは仕事に戻るけど、気をつけて帰ってね」

リーレ 「ありがとうございました」

青年 「うん」

青年、退場。

リーレ、児童書コーナーの方を見つめるが、しばらくしてから退場。

病院の受付。

保険証を出すリーレ。

看護婦 「本日はどちらですか？」

リーレ 「心療内科」

看護婦 「問診票を書いてください」

リーレ 「(受け取り)あの。今日は黒縄先生ですか」

看護婦 「ええ、黒縄先生ですよ」

リーレ 「(目で頷く)」

リーレ、待合所で待つ。

問診票を書く。

アナウンス 「番号札69番、69番でお待ちの方。内科2へどうぞ」

待合で座っていた1人が退場。

診票を書き終えたリーレ、受付へ渡しに行く。

看護婦 「それじゃ、おかけになってお待ちください。どうぞ(と番号札を渡す)」

リーレ、番号札を受け取り、再び待合へ。

アナウンス 「番号札54番、54番でお待ちの方。小児科1にどうぞ」

アナウンス 「番号札83番、83番でお待ちの方。心療内科1へどうぞ」

リーレ、立ち上がり心療内科1へ。

部屋のなかには机、ベッドなどがある。

机上の壁には非常に上手な黒縄先生の絵が飾られている。絵には子供の字で「タバコ先生へ」と書かれている。

リーレ、ドアを4回ノック。

「どうぞ」

「失礼します。ご無沙汰しています」

「ん。荷物そこな」

「はい。(机上の絵を見て)うわ、上手ですね」

黒縄先生 「ああ。中庭でよく会う小児科の子供、いや、正確にゃその見舞いの子供が描いてくれたんだ。イケメンだろ」

リーレ 「子供ですか？」

黒縄先生 「ああ。人物画以外も天才的だぞ。将来は絵で食っていけるかもな」

リーレ 「へえ……(と絵を食い入るように見つめる)」

黒縄先生 「(問診票を見ながら)で、薬がなくなったそうだな」

リーレ 「また1ヶ月分ほしいとのことですか」

黒縄先生 「前回から3週間と経っていないんだがな……」

リーレ 「……」

黒縄先生 「調子は」

リーレ 「いいんじゃないですか」

黒縄先生 「そうか。近々本人は来れそうか？」

リーレ 「来たら、多分また先生に結婚迫ると思うんですけど」

黒縄先生 「いい加減諦めるよう言ってくれないか」

リーレ 「すみません」

黒縄先生 「まあ、実際患者に想われることは少なくないんだがな。特にこの科は」

リーレ 「え、蚊ですか?(と辺りを見る)」

黒縄先生 「どこだ!?(と殺虫スプレーを出して)」

リーレ 「何言ってるんですか。今先生が」

黒縄先生 「は?……あ、ああ、違う、特に心療内科はと言ったんだ」

リーレ 「そうですか」

黒縄先生 「オレの前であまり虫の話はしないでくれ」

リーレ 「あ、ゴキブリ」

黒縄先生 「ひゃあああ!」

リーレ 「嘘です」

黒縄先生 「貴様!」

リーレ 「すみません」

黒縄先生 「まったくー死ぬかと思ったわ。(切り替えて)あまりこんなことを言いたくないがな、もう少し母親に興味を持ってやれないか」

リーレ 「はあ」

黒縄先生 「医者にも心の病は治せない。オレに出来るのはせいぜい話を聞くことと薬を出すことぐらいで、あとは本人とその周り次第だ、分かるな?」

リーレ 「ええ」

黒縄先生 「そういうことだ。薬はとりあえず2週間分出しておくが、しっかり用量を守るようにと伝えておいてくれ」

リーレ 「わかりました。用量を守れば黒縄先生も結婚してくれるかもって伝えておきます」

黒縄先生 「知ってるだろ、オレは人形しか愛せない」

リーレ 「なんでこの人医者出来てんだろ……」

リーレ、診察室を退場。  
待合へ戻ってくる。  
そこへ、リーちゃんとかったんが登場。

リーちゃん  
「じゃあもうすぐで学校来れるの？」

かったん  
「おお。行けるぜ」

リーちゃん  
「じゃあじゃあ、私が学校案内したげるね。あのね、かったんが思ってるよりすっごく広いんだよ」

かったん  
「うわあ、病院よりも？」

リーちゃん  
「うーん、病院……よりもかなあ！」

かったん  
「うおー！ めっちゃ広いじゃん！」

看護婦  
「ちよっと静かにしてね」

リーちゃん  
「あっ、ごめんなさい」

かったん  
「しいー」

アナウンス  
「83番の方、83番の方、受付へお越しく下さい」

リーレ  
「(立ち上がる)」

リーちゃん  
「静かにいこうね(と)かったんを見ながら後ろ向きに歩く」

かったん  
「あっ、リーちゃん」

リーちゃん、リーレとぶつかる。

リーちゃん  
「うわあ、ごめんなさい」

かったん  
「すみません。リーちゃん、大丈夫か？」

リーちゃん  
「うん。あの、大丈夫ですか？」

リーレ  
「大丈夫。前見て歩いてね(と)受付へ」

リーちゃん  
「怒られちゃった」

かったん  
「今のはリーちゃんが悪い。お姉さんが足の悪い人だったら大変なことになるってただろ？」

リーちゃん  
「うん」

かったん  
「な？ じゃ、早く外行ってグリコしようぜ」

リーちゃん  
「うん」

と、2人退場。

リーレ、お会計をしながら2人が去った方向を見つめる。

図書館の児童書コーナー。

児童書コーナーのすぐ側にある読書スペースの机には赤色のランドセルが置かれ、もう1人の利用者は端のほうでパソコンと向き合いながら時々本を捲っている。  
ランドセルの持ち主である少女(以下おばば様)、難しい顔で本を読みながらぐるぐると児童書コーナーを歩いている。  
本を読み終わったらしく、棚に戻すと次の本を物色している。  
一冊を手に取り読み始める。  
シマダの携帯が鳴る。

シマダ

「(気を配り)もしもし。はい、あっ今図書館で。はい、あー、もうすぐで書き終わるんですけど。あ、はい、はい、えっ、変更？ 変更？ ウソ？ いや、えっ、もう書き終わるのにですか？ えー、ちょおっと難しー」

おばば様

「(被せて)おい若いの、図書館では静かにせんか」

シマダ

「あっ、はいっ、すみません！(電話に)外出るんでちょっと待ってください、あ、やっぱかけ直します」

シマダ、メモ帳と電話を持ち。

シマダ

「若いの……？(と退場)」

おばば様

「ふん……」

おばば様、再び本を読みはじめる。その進行方向からリーレが静かに登場。じっとおばば様を見つめている。

おばば様、何でもないように踵を返し歩き続けるが、その途中で何かに気がついたように立ち止まり、振り返ってリーレを見る。

見つめ合う2人。

おばば様

「リーレか……？」

リーレ

「おばば様」

おばば様

「おお、リーレ、お前、ええ、久しいじゃないか。おお、よくぞ、よくぞ」

リーレ

「お久しぶりです、本当に。おばば様、元気だった？」

おばば様

「もちろんだとも、おばばは元気以外の何物でもないぞ。それよりリーレは元気なのかい、ええ、いやあ、嬉しいじゃないか」

リーレ

「元気よ。会えて嬉しいわ」

おばば様

「本当にだよリーレ。ええ、こんなに嬉しいことは久しくなかったね。ええ、リーレ……」

リーレ

「……」

おばば様

「リーレお前……村を滅ぼしたんだってねえ……」

リーレ

「うん……」

おばば様

「そうかいそうかい……、お前、あれから今世がはじめてのキオクガエリだろう」

リーレ

「ええ……。おばば様は？」

おばば様

「私はお前のおばばになってから今で2度目の人生さ、総じてもう5度目だねえ」

リーレ

「そうだったの」

おばば様

「ああ。そろそろ我が母のように幕を閉じようかとも思っていたんだが、ええ、こうしてお前に会えて嬉しいじゃないか。リーレ、お前、あまり自分を責めてはいかんよ」

リーレ

「……」

おばば様

「お前、あれだろう、母親のことは聞いたんだね」

リーレ

「ええ」

おばば様

「そうか……お前には酷なことをしてしまったね……」

リーレ

「……」

おばば様

「お前の母親は最後までお前のことを愛していたんだよ。私はね、あの子にも酷なことをしてしまったんだ。王都には私が行くべきだったのさ、私が……」

リーレ

「そんなの嫌よ」

おばば様

「いや、私はお前の母親を何としてでも止めるべきだったのさ。頑固な子でねえ、本当に、優しい子だったのにねえ……」

リーレ

「おばば様」

そこに利用者が帰ってくる。

シマダ

「無茶振りばっかしやがって。(舌打ち)書き直しか」

おばば様

「おばばはいつだってお前の味方だからね。リーレ、自分を責めずにね」

リーレ

「……ええ」

おばば様

「しっかりね。いつでも会いにおいで」

おばば様、リーレの肩をポンポンと叩き、ランドセルを背負う。

おばば様  
シマダ

「(シマダに)アンタもしゃきつとしなさいよ」  
「え、あ、はい。すみません」

おばば様、退場。

シマダ、荷物をまとめて退場。

リーレ、退場。

病院の受付。

診察券を出すリーレ。

看護婦

「お預かりします。心療内科で宜しかったですか」

リーレ

「あ、はい。今日は黒縄先生ですか」

看護婦

「黒縄先生は休憩です。(声を潜め)中庭にいらっしゃると思いますよ」

リーレ

「そうですか。あの、こっちですよね」

看護婦

「ええ。診察券どうしますか」

リーレ

「あとでまた来ます(と、返してもらおう)」

リーレ、退場。

病院の中庭。

タバコを吸いにやってきた黒縄先生が登場。

火をつけて間もなくグリコをしながらしーちゃんが近付いてくる。

しーちゃん

「パイナップル! (と言いながら登場)」

しーちゃん、舞台袖にいるかったんとじゃんけん。

黒縄先生、タバコを消す。

しーちゃん

「チヨコレイト! かったーん、ゴールしたよお」

かったん声

「うわーまじか」

しーちゃん

「あつ、タバコ先生!」

黒縄先生

「黒縄だ」

かったん

「タバコ吸ってたら身体悪くなんぞおタバコ先生」

黒縄先生

「黒縄だ。構わん、オレは月に1箱消費するかしないかくらいしか吸わん

からな」

しーちゃん

「それって多いの?」

黒縄先生

「圧倒的に少ない」

リーレ、この辺りで中庭に登場している。黒縄先生に気付いたが、しーちゃんとかったんにも気付いたため遠くから見つめてじっとしている。

かったん

「ふうん。オレ、大人になってもタバコは吸いたくないな」

黒縄先生

「まあ、吸えとは言わんが。頭は割とスツキリするぞ」

かったん

「うそだあ」

しーちゃん

「頭のなかも煙で曇りそうだもん」

黒縄先生

「ハハハハ。いいな、それ」

かったん

「なにがだろ」

しーちゃん

「わかんない」

黒縄先生

「そうだ。お前にもらった絵、デスクにしっかり飾ってるぞ」

しーちゃん

「えっ、ほんと？」

黒縄先生

「ああ。実物に似てイケメンだとよく褒められる」

しーちゃん

「へえ」

かったん

「こら、死んだ目しない」

黒縄先生

「調子はどうだ。小耳に挟んだ話、そろそろ退院だそうだな」

しーちゃん

「うん、かったんね、来月には学校来れるんだって！ 私が学校案内するの！」

黒縄先生

「へえ。おめでとう、良かったじゃないか」

しーちゃん

「かったんと一緒に時々遊びに来てあげるから、あんまり寂しがっちゃダメだよ」

黒縄先生

「お前はオレをウサギか何かだと思ってないか？」

かったん

「あのさ、しーちゃん、ごめん」

しーちゃん

「え？」

かったん

「その、オレ、まだ学校行けないんだって……」

しーちゃん

「え、なんで？ いけるって言ってたじゃん」

かったん

「今日の朝、やっぱまだダメだって、お医者さんが言ったんだよ……」

しーちゃん

「なんで？ かったん、良くなったんでしょ？」

かったん

「病気が、ほかのところに動いてたんだって。ごめんな。すぐに治して、しーちゃんに学校案内してもらおうから。」

しーちゃん

「つらいのはかったんなのに、どうしてかったんが謝るの？ ごめんね、私にはしゃいじゃったから、言いにくかったんだよね。ごめんねかったん」

かったん

「……ごめんな……」

黒縄先生

「(タイミング見て)今日は少し冷えるな。もう戻ろう」

かったん  
「うん……」  
黒縄先生  
「送るよ」  
かったん  
「大丈夫だよ。行こう、しーちゃん」  
しーちゃん  
「うん。タバコ先生、バイバイ」  
黒縄先生  
「ああ」  
かったん  
「またな」  
黒縄先生  
「身体冷やすなよ」

しーちゃん、かったん、退場。  
黒縄先生も行こうとするが、その途中でリーレに気がつく。

黒縄先生  
「うわっ！ お前いるなら声くらい掛ける」  
リーレ  
「あ、どうも……」  
黒縄先生  
「ああ、もう2週間か。薬だろ？」  
リーレ  
「はい」  
黒縄先生  
「もう戻るから番号札を取って待っていてくれ(と行こうとする)」  
リーレ  
「黒縄先生」  
「なんだ」  
「さっきの男の子は、重い病気なの？」  
「……まあな。見たのか」  
「治るんですか？」  
「ノーコメント、専門外だ。なぜお前が気にする」  
「いえ、ちょっと気になっただけで」  
「そうか。じゃあまあ、早く来いよ。そろそろ混んでくる時間だ」

黒縄、退場。  
リーレ、退場。

8

図書館。

青年、返却済みの本を棚に戻しに舞台へ。  
おばば様、本を読み(歩き)ながら登場。

青年  
「こんにちは」  
おばば様  
「(立ち止まり)ん、おお。こんにちは」  
青年  
「今日は何読んでるの？」  
おばば様  
「ん(表紙を見せ)」

青年 「へえ。宇宙の？ すごいねえ」

おばば様 「いやあ、これがなかなか面白い」

青年 「そうなんだね。オレも今度読んでみるよ」

おばば様 「それが良い。宇宙の本を読んでいると、生き物というのは、いや、地球

という存在がいかにちっぽけなものが分かり、何だか安らかな気持ち  
になれるじゃないか」

青年 「それ安らかなの？ うーん、あんまり壮大すぎるとキャパオーバーしちゃ  
うなあ」

おばば様 「まあ、まあ、何も宇宙を感じるために読むこともなからう。興味を持つ

たなら何となく読めば良い、本とはいっだってそう言うものだ」

青年 「笑って」そうだね」

青年、本を片付ける。

おばば様、再び本を読みながら歩き始める。

そこにリーレ、登場。おばば様に会うために来たのだが、おばば様は退  
場しており、青年がリーレに気がつく。

青年 「あ、こんにちは」

リーレ 「(頷く)どうも」

青年 「もしかして、渡したやつ全部読んだ？」

リーレ 「いえ、まだ」

青年 「そっか。あ、全然、急かしているとかじゃないから。ただ、翻訳でどっ  
か分かりにくいところがあったら教えてくれたら嬉しいな」

リーレ 「(ボソッと)翻訳も読むのか」

青年 「え？ あ、もちろん嫌じゃなければで」

リーレ 「いえ。わたしで良ければ」

青年 「ありがとうございます」

リーレ 「でも。あの、時間かかると思っています」

青年 「ああ、普段あんまり本読まないんだもんね。ごめんね、押し付けて」

リーレ 「いえ。私が欲しいって言ったんで」

青年 「ちなみにどのあたりまでかは読んだ？」

リーレ 「えーと、魔女が、インタビューのために青年を家へ招き入れるところま  
では」

青年 「最初の一行か」

リーレ 「なかなか進まなくて」

青年 「いや、それぞれペースがあるし。僕も実は、活字を読むのは苦手だった

んだ」

「へえ」

青年 「でも、映像でもない、絵でもない、本にしかない面白さを見つけちゃったから、仕方なく、頑張って読んでるって感じかな」

「……魔法の」

「え？」

リーレ 「魔法の話は、よく読みますか？」

青年 「アハハ、まあね。昔からどうにも魔法、っていうか、魔法への憧れが強くて。結構からかわれたりもして恥ずかしかったんだけど、好きなものは仕方ないかなって、今では」

「……そうですか」

青年 「あ、変な話になっちゃったね。オレ仕事に戻るけど、なにかあったら1階の受付にいるから」

「ええ」

「それじゃ」

青年

青年、退場。

リーレ、本棚を眺める。

そのうちに背中を預けて目を閉じる。

おばば様、そろそろと登場。

おばば様

「(優しく)リーレ」

リーレ

「おばば様」

おばば様

「珍しく本を読みに来たとしても思ったが」

リーレ

「知ってるでしょ、私本は」

おばば様

「おお、十分に知ってるともね。おばばに会いに来てくれたんだろう、ええ、そうだろうともさ」

リーレ

「(笑って)こんなに近くにいるんだもん。会いたくなるわよ」

おばば様

「嬉しいことだね、リーレ、おばばもお前に会いたいともさ。だがお前ねえ、あんまり、あんまりおばばに会いに来てばかりでもダメだよ」

リーレ

「どうして？」

おばば様

「今の家族を大切にしなさい。それが何より一番だ。おばばのことを大切に想ってくれているのは嬉しいがね、今の、リーレでなくなった今の家族を、友人を、何より大切にすべきなんだよ」

リーレ

「……。……どうして？」

おばば様

「どうしてもこうしても、あるもんかい。だがお前にはまだまだ難しいか

もしれないねえ。大丈夫、すぐには言わないがね、お前だって、きっといつか理解できる」

リーレ 「私の家族はおば様だけよ」

おばば様 「リーレ、お前の今世の母親は、私の娘に負けなくらいにお前を愛しているはずだよ。お前も少しずつでいい、どうか大切に想っておやり」

リーレ 「黒縄先生みたいなこと言わないで」

おばば様 「そりゃ誰だい」

リーレ 「(蹲りながら)おば様だけで良いわ。人間の家族なんていらぬ。人生を何度繰り返したって、私の家族はおば様だけよ」

おばば様 「呆れたねえ。お前、いつから赤子に戻ったんだい」

リーレ 「赤ん坊は人間のほうよ……私の今世の母親も、人生をつまらぬと嘆く

同級生も、みな生まれ変わったばかりの赤子じゃないの」

おばば様 「違う。記憶はなくとも彼らも生まれ変わりを繰り返しているんだよ、リーレ」

リーレ 「記憶がなければ生まれたばかりも同然だわ……」

おばば様 「記憶を持つお前のほうが、よほど赤子のようなだとは、ええ、おかしな話じゃないかい」

リーレ、本棚に背中を預け蹲っている。

おばば様 「お前ねえ、そうやって拗ねれば私が慰めてくれると思ってるんだろう」

リーレ 「……」

おばば様 「お前ねもう少し顔を上げて、まわりを見なさい。お前の視界はあまりにも狭すぎるみたいだからねリーレ」

リーレ 「……」

おばば様 「リーレ、……私はお前に、お前自身を大切にしてほしいだけなんだよ」

リーレ 「……だったら私の家族でいてよ……」

おばば様 「リーレ、今のお前と向き合ってやりなさい」

おばば様、ランドセルを背負い、退場。

リーレ、顔を埋めて蹲ったままである。

リーレ 「……シキ……メカ……」

そこに音もなく、女の子(少年3の妹、以下妹)が登場。蹲るリーレをじっと見つめている。

リーレ、気配を感じて顔をあげる。  
見つめ合う2人。  
少年3が登場。

少年3 「勝手に行くなよ。(リーレを見て)あ、すみません、あの、僕の妹が、何か」

妹 「この人ずっと座ってたもん」

少年3 「え。大丈夫ですか？ 気分悪いんですか？」

リーレ 「あ、大丈夫、です、いや、大丈夫。ありがとう」

少年3 「それならいいんですけど」

妹 「お姉ちゃん、どいて」

少年3 「こら、そんな言い方ダメだって。こういうときは少しどいてくれませんか、って、丁寧をお願いするの」

妹 「わかんないもん」

少年3 「わかるまで教えるよ」

リーレ 「ごめん、邪魔だったよね(と退く)」

妹 「うん」

少年3 「うんじゃない。すみませんすみません、失礼なことばかり」

リーレ 「構わないわ。(柵を見て)この辺りは、ファンタジーものみたいだけど」

妹 「うん。魔法使いのお話借りに来たのよ」

リーレ 「そう」

少年3 「オススメは、えーっと(本を探す)あった、魔法使いは誰だ。(妹へ)知り合いのお兄さんが面白いって」

妹 「本物の魔女出てくる？」

少年3 「え、本物？ そんなの出てこないよ」

妹 「違うもん」

少年3 「違うって何が」

妹 「私が読みたいのは、本物の魔女が出てくる話だもん」

少年3 「何言ってるんだよ。本物の魔女が出てくる話なんてないよ」

妹 「違うもん」

少年3 「ええ……？」

リーレ 「あ、宗教の柵になら、実際にあった魔女裁判とか、魔女狩りの本があるらしいけど」

少年3 「え、あ、ほ、本当に魔女がいたんですか？」

リーレ 「え、ええと、そうなんじゃないかな。少なくとも昔は、魔女が狩られてたわ」

妹 「(ワクワクして)狩られるって何？」  
リーレ 「殺されるってことよ」  
妹 「殺されるの？　なんで？」  
リーレ 「え、えーと、ちょっと待ってて」

と、リーレ、宗教コーナーへ。

妹 「ねえ、なんで殺されるの？」  
少年3 「わかんないよ。怖いからじゃない？」  
妹 「魔女が？」  
少年3 「うん。怖いから、殺しちゃうんだよ、きつと」  
妹 「魔女は怖いのか？」  
少年3 「わかんないよ。見たことないんだもん」  
妹 「お兄ちゃんでもわからないの？」  
少年3 「(返事と言っていることがチグハグ)そんなことないけど、だって魔女はいないから、分からないだけなの」

リーレ、魔女とキリスト教、魔女狩り、教皇と魔女など本を何冊が取って戻ってくる。

妹 「魔女いるもん」  
少年3 「いないよ。魔法なんてないの」  
妹 「あるもん。私使えるもん」  
リーレ 「え」  
少年3 「じゃあ今すぐ使ってみろよ」  
妹 「無理だもん」  
少年3 「無理なんじゃん」  
妹 「違うもん」  
リーレ 「ねえ、いつ魔法を使うの？」  
妹 「あのね、信号にね、早く青になれって心のなかでいっぱいお願いするとね、早く変わってくれるの」  
少年3 「そんな魔法じゃないよ」  
リーレ 「他には？」  
妹 「こがなくても自転車が勝手に進んでくれるの」  
少年3 「嘘だあ。お前、それ坂道を降りたあととかだろ」  
妹 「違うもん。坂道降りてからいっぱいあともん」

少年3

「それは当たり前なの。魔法じゃないの」

妹

「魔法だもん。魔法使えるもん。お姉ちゃん、魔法使いの本持ってきてくれたもん」

リーレ

「一応」

少年3

「本当なわけないだろ。いいか、本に書いていることは全部嘘なの」

青年

「(登場して)いや、本に書いていることはその本にとっての本当だよ」

少年3

「あ、お兄さん」

青年

「何か騒ぎ？ 一階まで聞こえてきたけど」

少年3

「すみません、お騒がせしました」

妹

「魔女いるもん……」

少年3

「いないってば」

青年

「(リーレを向く)」

「魔女はいるか否かの口論中です」

リーレ

「なるほど。うん、魔女はね、昔はいたらしい」

妹

「ほら！」

少年3

「ええ……」

青年

「でもいなかったかもしれないらしい」

少年3

「(少年3を見て)どっち？どっち？」

妹

「(妹を見て)どっち……う？」

青年

「誰にもわからないんだよ。だからね、昔はいたのかもしれないけど、やっぱりいなかったのかもしれないし、今もどこかにいるのかもしれないけど、やっぱりいないのかもしれないんだ」

2人、青年の目を見てじっと聞いている。

青年

「わからないから、絶対いないとか、絶対いるとかって決められないんだよ」

少年3

「うん……」

妹

「あのね、クラスの男子がね、魔女なんていないって言うってくるの」

青年

「うん」

妹

「私、いないって言われて悲しくて」

青年

「うん」

妹

「いつもね、男子の足の間いっぱい蹴ってるの」

青年

「あ、足の間……!?!」

少年3

「やられっぱなしで済ますな。うちの家訓なんです」

青年

「強いね」

妹 「魔女はいるかもしれない？」  
青年 「ああ」  
妹 「いないかもしれない？」  
青年 「ああ」  
妹 「じゃあ、私、魔女はいる」  
青年 「ああ。君が魔女はいるって信じているように、クラスの男の子はね、いないって信じてるんだと思う。だから、どっちも本当だと思って、男の子にも優しくしてあげてね……」  
妹 「うん。お母さん言ってた。男子はみんな、いつまでも子供なんだって」  
青年 「ははは、間違いない」  
少年3 「どういう意味だよ」  
妹 「お兄ちゃん分かんないの？」  
少年3 「わかるもん。でも、お前がわかってるのか聞いてみただけだもん」  
青年 「(笑う)」  
リーレ 「どうする？ これ」  
妹 「ちょうだい」  
青年 「(リーレの腕を見て)あー、それはちょっと難しいと思うけど」  
妹 「どれくらい？」  
青年 「うーん、お兄ちゃんでも難しいかも」  
妹 「じゃあいい」  
少年3 「すみません、せっかく持ってきてくれたのに」  
リーレ 「ううん」  
青年 「(リーレに)借りてく？」  
リーレ 「借りません」  
青年 「(笑ってから妹に)せっかくだから何か借りて帰りなよ。オススメは魔法使いは誰だ、っていう本なんだけど」  
少年3 「あつ、さつき(と棚から本を出す)」  
妹 「うん」  
少年3 「本物の魔女は出てこないよ」  
妹 「うん。でも、この本にとつての本だから、いいの」  
青年 「(驚いて)うわ、めちゃうくちゃ賢いな」  
妹 「お兄さんがさつき言ってたもん」  
青年 「アハハ、もしかしたら本当に魔女かもね。貸出するよ、ついてきて」

2人、頷く。

青年

「(リーレ)じゃあ」

リーレ

「(頷く)」

3人、退場。

リーレ、じっと考えている。本を抱く腕に力がこもる。

リーレ、じっと考えている。なにかを、じっと……。

暗転。

以下無音芝居が続く。

病院。

中庭に座り手遊びをしているシーちゃんとかつた人を病院二階の渡り廊下(舞台端)から見つめているリーレ。

暗転。

中庭でケンケンパツしているシーちゃんとかつた人を舞台端のベンチに座り、本等で顔を隠しながら見つめているリーレ。

暗転。

中庭で遊んでいるシーちゃんと、その途中お腹を押さえて蹲るかつたん。心配するシーちゃん。人を呼びに行くため病院へ走る。

自販機の物陰で2人を見ていたリーレ、慌てて飛び出そうとするリーレ、我にかえり、思い留まる。

しずかに祝福。

苦しんでいたかつたん、少し表情が和らぎ、ゆっくり立ち上がる。

暗転。

中庭のベンチでスケッチブックに絵を描いているシーちゃんとかつたん。それを舞台端のベンチで見つめているリーレ。

暗転。

ベンチに座っているリーレ。

そこに黒縄先生が登場。珍しく白衣を羽織っていない代わりに鞆を持っている。

帰る前にタバコを吸いに来たらしい。

タバコを吸いながら携帯を確認している。

リーレ、なんとなく黒縄先生をじっと見つめている。

その視線を肌で感じたらしい黒縄先生、リーレを見つけ視線を交わす。少しの間見つめ合う2人。

黒縄先生

「いるなら声くらい掛ける」

リーレ

「お帰りですか」

黒縄先生

「ああ。これでももう少し早く帰れる予定だったんだが」

黒縄先生、黙ってタバコを吸っている。  
リーレ、黙っている。

黒縄先生

「どこか悪いのか？」

リーレ

「え？」

黒縄先生

「最近通ってるだろ。よく見かける」

リーレ

「あ、ええ。ちょっと、あー、胃腸が」

黒縄先生

「その辺りだとストレスかもしれないな。オレも心当たりがある」

リーレ

「へえ。先生、ストレス溜め込みやすそうですもんね」

黒縄先生

「主に小児科の同僚のせいだな」

リーレ

「え。あの、小児科の先生に知り合いがいるんですか」

黒縄先生

「ここで働いてりゃ勝手に知り合う。あんなヤバいのが医者とは世も末だな」

リーレ

「人のこと言えないんじゃない」

黒縄先生

「患者を私の天使呼び。机の上には何故かベルが並んでるし。コレクションだそうでな、訳がわからん」

リーレ

「へえ。人のこと言えないんじゃない」

黒縄先生

「なんだ？」

リーレ

「なにも。あの、その同僚の方から、患者のこと聞いたりしないんですか」

黒縄先生

「愚痴の1つも聞かないが。なぜだ？」

リーレ

「いえ、何となく……」

黒縄先生

「そうか。(自販機を見て)何か飲むか」

リーレ

「大丈夫です。買い物もあるんでそろそろ帰ります」

黒縄先生

「そうか。2週間後、忘れるなよ」

リーレ

「ええ」

黒縄先生

「用量は」

リーレ

「伝えてますよ」

リーレ、退場。

黒縄先生

「……オレが結婚するって伝えてるんじゃないだろうな……」

そこにしーちゃんが登場。

自販機に向かおうとしていたが、途中で黒縄先生を見つけて駆け寄る。

「タバコ先生だ！」

黒縄先生(とタバコを消す)

「タバコ先生、白衣は？」

「今日はもう先生は終わりだ。家に帰るんだよ」

「へえ。タバコ家で吸わないの？」

「ああ。家だとフイアンセ達に匂いがつく」

「フアアセン？」

黒縄先生

「ま、恋人だ」

「えー！ タバコ先生、恋人いるの？」

「まあな。たくさんいる」

「ええ……なにそれ……」

「お前もそろそろ帰れよ」

「タバコ先生送ってよ、私と家近いでしょ」

「……住所を教えたことはないんだが」

「この前お母さんとスーパー行ったとき先生が買い物してるの見かけた」

「げえ」

「お母さんが、(真似て)地元のスーパーだから、先生この辺りに住んでら

っしゃるのねえ(ハート)って」

「オレもうちよつと吸って帰るから遅くなるぞ」

「えー、どれくらい？」

「(死ぬほど適当に)いっぱい」

「ケチ！」

「ケチじゃない。ジュースでも買ってやるから飲みながら帰れ」

「いいよ。買ったんのお母さんからジュースのお金もらったんだ」

「そうか」

黒縄先生

「えー、ジュースを買う。」

「じゃあ、またねケチ先生」

「タバコだ。違う、黒縄だ」

「(笑う)」

「寄り道するなよ」

「本屋さん行くのー！(と退場)」

黒縄先生、しーちゃんを見送ってから、タバコを出す。

しーちゃん

黒縄先生

しーちゃん

黒縄先生

しーちゃん

黒縄先生

しーちゃん

そこに衆合先生、登場。

衆合先生 「あら、今日はお早いお帰りですか？」

黒縄先生 「噂をすれば影とはよく言ったものだ」

衆合先生 「何か」

黒縄先生 「何の用だ」

衆合先生 「散歩です」

黒縄先生 「暇か」

衆合先生 「まさか」

黒縄先生 「そうか。それじゃあな、オレは帰る」

黒縄先生、帰ろうとする。

衆合先生 「(引き留めるように)ああ、そう言えば何だかさつき病院内が騒がしかっ

たんですよねえ」

「へえ」

衆合先生 「私の黒縄先生を出してえって騒ぎながら廊下を走る女を近くにいた医者  
と看護師と患者総動員で押さえつけて」

黒縄先生 「急患か！ くそ！」

衆合先生 「こっちはです」

衆合先生、黒縄先生、駆け足で退場

人気がない帰り道。

辺りは先ほどよりずいぶん暗くなってきたが、まだ日が完全に落ち  
きっているわけではない。

リーレ、買い物袋を提げて登場。彼女は不審者がついてきているこ

に、少し前から気がついていて。不審者は一定の距離を開けてついてき  
ている。

リーレ、立ち止まる。

リーレ 「私に用ですか」

リーレ、振り返り確認してから、一気に駆け出し退場。

不審者それを追いかけて退場。

別の道。

リーレ登場。

近くの物陰に隠れ指を組む。

リーレの前を駆け足で不審者が過ぎ去り退場。

リーレ、物陰から出て不審者の去った道を見る。

歩き出して、そのまま退場。

不審者登場。リーレが見当たらない怒りを近くのゴミ箱にぶつける。

不審者  
「くそ、やりそこなった」

そこにジュースを飲み、片手に本屋の袋を提げたしーちゃんが登場。

ゴミ箱に怒りをぶつける不審者を見て怖がり一瞬固まる。

不審者、しーちゃんを見る。

不審者  
「お嬢ちゃん、可愛いね」

しーちゃん  
「私？」

不審者  
「うん。年はいくつ？」

しーちゃん  
「あの、7才です」

不審者  
「1人？ お母さんは？」

しーちゃん  
「私、今から帰ります」

不審者  
「今は1人？」

しーちゃん  
「え、あの、その」

しーちゃん、段々怖くなる。

不審者  
「1人？」

しーちゃん  
「あっ、あの、あとから、タバコ先生来るから」

不審者  
「今1人だよね？」

しーちゃん  
「ううん」

不審者  
「1人だよね」

不審者、しーちゃんに近づく。

不審者  
「1人は危ないから、お兄さんが送ってあげるよ」

しーちゃん  
「いっ、いい、いい」

不審者  
「ジュース飲んでるんだ、いいなあ。お兄さんにも一口ちょうだいよ」

しーちゃん  
「い、いや！（と缶を投げつける）」

不審者  
「てめえちよっと人が優しくすりゃ調子乗ってんじゃねえぞ」

しーちゃん

「叫ぶ」

不審者、しーちゃんを掴むが急に何かに首根っこを掴まれたように後ろに倒れる。

不審者

「舌打ち」

しーちゃん

「動けずに叫ぶかわあわわ言っている」

不審者

「うるせえんだよメスが」

と、不審者立ち上がろうとするが、その途中でまた転ぶ。

不審者

「何だ!？」

リーレが駆け足で登場する。

しーちゃん、叫びながら、目は閉じていてリーレは見えていない。

不審者

「立ち上がろうとする度に転び）なんだよカス、くそ、どうなってんだ」

リーレ、不審者に激しい憎悪を抱きながら見つめる。

リーレが見つめると不審者が苦しそうにもがき出すが、しーちゃんは分の声で聞こえない。

と、リーレ、ハツとして来た道を引き返し退場。リーレ退場と同時に、しーちゃんに近い側から黒縄先生が駆け足で登場し、しーちゃんの肩を抱く。

しーちゃん

「タバコ先生」

黒縄先生

「ああ、タバコ先生だ。(不審者を見て)一応聞くが知り合いか」

しーちゃん

「首を振る」

黒縄先生

「よく叫んだ。怖かったな」

黒縄先生、苦しそうにしている不審者を見て不思議そうな顔をする。

黒縄先生

「(しーちゃんに)アイツはどうした」

しーちゃん

「分かんないよお」

黒縄先生

「ああ、ああ、そうだよな。大丈夫だ、とりあえず警察を呼ぶ」

不審者、反応。

携帯を取り出す黒縄先生。

不審者

「らあああ」

と、黒縄先生に襲い掛かるが大事なところを蹴られ呆気なく撃沈。

不審者

「死ぬほど痛い」

黒縄先生

「おっと、悪い。狙ったわけじゃない(電話が繋がりに)あ、もしもし。事件です、3丁目の、あー(電柱か何かを見て)ニー6。今です今、友人、あ、知り合いの小学生が不審者に襲われて、とりあえず早く来てくれ…」

暗転。

病院の中庭。

遊んでいるかったんとしーちゃん。

離れた場所から見ているリーレ。

しーちゃんの母親が迎えに来る。

しーちゃん、母親に駆け寄る。

母親と手を繋ぎ、かったんに手を振る。

リーレ、遠くからそれを見ている……。

9

通学路。

子供声

「ばいばーい」

子供声

「また明日ね」

ランドセルを背負ったおばば様が登場。

反対側からリーレ、登場。

リーレ

「おばば様」

おばば様

「おお、リーレじゃないか」

リーレ

「おばば様、あの」

おばば様

「思い詰めた顔をしてどうしたんだい。お前せっかくの可愛い顔が勿体無いよ」

リーレ

「うん……」

おばば様  
「まあまあ、少し歩こうじゃないか。お前、時間は大丈夫なんだろう」  
リーレ  
「ええ……」

2人、しばらく歩く。一度退場してから、すぐまた登場して少しくらい  
でようやくリーレ、話し出す。

リーレ  
「ねえ、病気で祝福で治せないの？」

おばば様  
「随分と抽象的な物言いだね。お前、おばばの風邪を治してくれたことが  
あるじゃないかリーレ。ああ、よく覚えてるよ、嬉しかったねえ」

リーレ  
「結局風邪じゃなくてただ咳き込んでただけだったけど」

おばば様  
「ああ。よく覚えてるよ、ひどく嘔吐したねえ」

リーレ  
「そう言うんじゃないくて、例えば胃潰瘍とか、(詰まってるから)ガンとかさ  
……」

おばば様  
「お前、もうやってみたんだろう」

リーレ  
「え」

おばば様  
「治せなかったんだろう」

リーレ  
「……ええ」

おばば様  
「難しいだろうねえ」

リーレ  
「痛みはとれるのに……病気は治せなかったわ」

おばば様  
「おや、そりやお前、痛みなどちょっと感覚を奪えば良いだけだからね  
え」

リーレ  
「だったら病気だって、ちょっと病魔を奪えば良いんじゃないの……」

おばば様  
「難しいだろうねえ。だがまあお前、諦めずに祈りなさいね。誰かのため  
を想う気持ちほど強いものはこの世にないからね」

リーレ  
「(一緒に)この世にないからね」

おばば様  
「大丈夫、お前は優しい子だよリーレ」

リーレ、小さく微笑む。(私は優しくなんかないわ……)  
歩き続ける2人。

リーレとおばば様の側を小学生の女の子2人が通り過ぎる。

女の子2人、自由帳を眺めながら。

小学生1  
「(一生懸命に)こっちが魔女見習いのミーコで、うさぎちゃんは使い魔な  
の」

小学生2  
「えー、使い魔はねちゃんだからおかしいよ」

小学生1  
「違うよお、うさぎちゃんがいいもん」

と、会話しながら退場。

リーレ

「魔女って、空想の存在なのね」

おばば様

「そうだねえ。今の世の中じゃあ魔女だと言っても火炙りにはされんが、頭のおかしいやつだとは思われるだろうね」

リーレ

「祝福なんて使ったら大騒ぎでしょうね」

おばば様

「誰も信じないだろうねえ、頭のなかで、勝手にトリックだと置き換えてくれるのさ」

リーレ

「……生きにくい？」

おばば様

「さてねえ。リーレ、お前はどうかい？」

リーレ

「……わからない」

おばば様

「そうだねえ、その通りさ。おばばもね、もう5度目の生だと言うのにねえ、未だに生きやすい、生きにくいなんてわからないから不思議なものだよ」

リーレ

「おばば様でも、わからないことがあるのね」

おばば様

「ああ、もちろんだとも。この世にはね、永遠を生きてもわからないことで溢れているんだよりーレ」

リーレ

「永遠を生きても？」

おばば様

「ああ、愉快だろう。本当に、私たちは人より少し有難い。何度もこの愉快を味わえるなんて有難いだろうリーレ。私はねえ、今回の生でもう幕を下ろすつもりさ。リーレ、お前にも会えてね、こんなに嬉しいことはきつと生涯ないだろうねえ」

リーレ

「私も幕を下ろすわ。この人生でおばば様と一緒に終わるわ」

おばば様

「なにを言っているんだい。お前まだまだ2度目だと言うのに」

リーレ

「……私ね、あの日、村のみんなを1人残らず殺したの……」

おばば様

「……ああ」

リーレ

「今世でもね、……殺したの、3人も。1人は、学校の先生だったの。教室に2人きりになったときに、服を脱がせようとしてきたから、怖くなつて殺したわ」

おばば様

「ああ、私だつてきつとそうしている」

リーレ

「2人目は同級生だったの。ちょっと我慢すれば良かったんだわ、殺すことなかった。ただちょっと悪口を言われただけだったのよ、私、あまりにも鬱陶しくなつて、お望み通りにつて殺したわ」

おばば様

「……」

リーレ

「母親なんてね、ずっとずっと殺してるの。一度もお母さんと呼べない

の。他人にしか思えなくて、うまく接せれないの。それで母親、私のこ  
とで心を病んでしまったわ。分かっているのに、私ずっと見殺しにして  
るのよ……」

おばば様

「そうかい」

リーレ

「恐ろしかったわ、人を殺したとき何も感じなかったの。罪悪感の欠片も

……。生きているってことを、忘れてたんだわ……」

おばば様

「ああ。そうかもしれないね」

リーレ

「おばば様、人嫌いだっただでしょ。おばば様は、人を殺したことはあ

る？」

おばば様

「まあ、ないとは言わないが。おばばは人が嫌いとは言っていないはずだが

ね」

リーレ

「え？ 言ってたじゃない、村の人間をあまり信用しちゃダメだって。買

い物だって誰にも会いたくないから、トメさんに頼んでたんでしょ？」

おばば様

「村の人間は嫌いさね。そりゃ娘を売った人間を誰が好むもんか」

リーレ

「ほら、だから……」

おばば様

「おばばは人間が嫌いだなんて言っていないねえ。リーレ、生き物というの

はね、どれだけ醜く、どれだけ不快だろうとも、命という時点で等しく  
素晴らしいんだよ。リーレ、命というのは、生きてるだけで祝福すべ  
きものなんだよ」

リーレ

「全て？」

おばば様

「ああ。全て尊いねえ」

リーレ

「嘘だわ。死んだほうがいい人間だっているじゃないの」

おばば様

「お前いつからそんなに傲慢になったんだい。人の価値なんて誰が決める  
ものでもないさね、リーレ、命はね、全て海からはじまった尊いものな  
んだよ。お前は星でも水でも土でもなく、お前自身として奇跡的に生を  
受けたリーレ。アツカンパーネだろう。それだけでもう祝福だとは思わ  
ないかい」

リーレ

「……」

おばば様

「きつとお前にもいつか分かるだろうね。理解するには、まだまだ生きて  
いないのさ、リーレ、お前はまだまだ生きて、学ぶべきだねえ。今世で  
終わりにするだなんて、ああ、おばばは泣けてしまうよ。お前ね、もっ  
ともっと本を読みなさい」

リーレ

「本は嫌いだわ」

おばば様

「変わらないねえ、本は素晴らしいよ。児童書だからとバカにも出来なく  
てねえ。ああ、人の想像力というのはまるで宇宙さながらさね」

リーレ

「規模が大きすぎて分からないわよ」

おばば様

「ああ、だったら宇宙の本を読みなさい。リーレ、私たちなんてね、宇宙のなかをただよう小さな星の小さな小さな……」

と、おばば様、リーレ、退場。

舞台、暗くなる。

明るくなる。

噴水広場。

女2人が会話しながら登場。

サトー 「え、まじかあ！」

シマダ 「そう、まじ。いや、まじで夢かと思った。ユユウキくんが、私の脚本に……!!」

サトー 「おめでとー」

シマダ 「甘美なる夢、天の祝福、女神の宴」

サトー 「急な中二病やめて」

シマダ 「途中で路線変更って言われたときは本気で殺意沸いたけど今は感謝しかない。ありがとうタナカさん」

サトー 「おー」

シマダ 「そっちレポート終わった？」

サトー 「ああ、うん、もう教授に提出したわ」

シマダ 「おー」

などと言いながら退場。

入れ替わるように少年1が駆け足で登場。

少年1 「おせーぞおー」

少年3 「ボールは？」

少年2 「ボク持つてるよお」

少年3 「オツケー」

と、そこに青年が登場。

少年1 「あつ、兄ちゃんじゃん」

青年 「ああ！ こんにちは」

少年2 「塀から落ちて死にかけてたお兄さん！」

青年 「死にかけてたことになってるんだ」

少年3 「先日はありがとうございました」

青年 「妹さんと仲良くしてる？」

少年3 「はい。あいつ、あれから読書にはまったみたいで」

青年 「良かった。オススメの本ならいつでも伝えるよ」

少年3 「ありがとうございます」

少年1 「どったの」

少年3 「ちよっとね」

少年2 「ちよっと？」

少年1 「何だよ。あとで教えろよな」

青年 「今からどっか行くの？」

少年1 「キャッチボール」

青年 「またボール乗せないようにね」

少年2 「取れなくなったらまた取ってねえ」

少年3 「バカ。(青年に)気を付けますから」

青年 「アハハ」

少年1 「兄ちゃんはどこ行くの？」

青年 「図書館だよ」

少年1 「あー、本好きそう」

青年 「そう？」

少年3 「図書館で働いてるんだよ」

少年1 「へえ」

少年2 「ねえ、早く行こうよ」

青年 「寒くなってきたから風邪引かないようにね」

少年1 「おう、兄ちゃんもな」

少年3 「失礼します」

少年2 「またねー」

少年1、2、3、駆け足で退場。

青年 「元気だなあ」

と、前からリーレが登場。

青年 「あ」

リーレ 「あ。こんにちは」

青年 「こんにちはは。ちよっと寒くなってきたね」

リーレ 「ええ」

青年 「どこか行くの？ あ、女の子にこんなこと聞いちゃダメだね」

リーレ 「いえ。ちょっと病院に」

青年 「そう。お大事にね」

リーレ 「ありがとうございます。あ(鞆から取り出し)これ、読みました」

青年 「ああ、祝福。いいよ返さなくて、コピーだし」

リーレ 「そうですか、じゃあお言葉に甘えて(と仕舞う)」

青年 「面白かったでしょ」

リーレ 「ええ、まあ。あ、翻訳なんですけど」

青年 「どうだった？」

リーレ 「とても丁寧で、分かりやすかったです。大丈夫、すごく良いと思いますよ」

青年 「そっか、良かった。ははは、なんだか君にそう言われると嬉しいな」

リーレ 「(微笑む)」

青年 「今も昔も人間の想像力はたくましいよ。この作者の話が気に入ったんなら、翻訳したものがあと2つあるから言ってね」

リーレ 「まだあるんですか？」

青年 「まあ実際、本というより日記みたいだけど。そっちにも祝福の魔女の名前が登場するから、小説を日記調にしたってことなんだろうね」

リーレ 「もしよかったら、コピーしてもらえませんか」

青年 「もちろん。いつでも取りに来て」

リーレ 「ええ、また伺います」

青年 「うん。それじゃあね」

リーレ、行こうとするが。

リーレ 「(青年を振り返り)あ。あの」

青年 「(振り返り)?」

リーレ 「案外いるかもしれませんよ、魔女って」

青年 「ああ。だったらいいね」

リーレ、青年、退場。

病院の中庭。

黒縄先生とリーレが歩きながらやってくる。

黒縄先生

「そうか」

リーレ 「はい。あの、まだ全然、何をすればいいのか、分からない状態なんですけどね」

黒縄先生 「焦ることはない。少しずつ向き合っていくことだ」

リーレ 「そうしてみます」

黒縄先生 「時間はかかるが大丈夫さ。手助けぐらいにはオレもなれるだろう」

リーレ 「もう十分なってくれていますよ、黒縄先生」

黒縄先生 「まあ、だろうな」

リーレ 「アハハ」

黒縄先生 「(自販機を見て)何か飲むか」

リーレ 「いえ」

黒縄先生 「そうか」

リーレ 「近々母が来るそうです」

黒縄先生 「マジか」

リーレ 「本音出てますよ」

黒縄先生 「ま、定期的に診ておかないとだしな。ちゃんとお前も付き添いで来るんだぞ」

リーレ 「もちろん」

黒縄先生 「薬の量も安定しているし過度な心配は不要そうだが」

リーレ 「そこは、まあ。でも黒縄先生との結婚願望は諸々抜きにして本気みたいですよ」

黒縄先生 「無理。オレ人形しかダメだって」

リーレ 「ブレませんね」

リーレ 「しーちゃんとかったんが駆け足で登場。」

しーちゃん 「タバコ先生だ」

黒縄先生 「黒縄だ」

かったん 「(リーレを見て)誰？」

黒縄先生 「友人だ。じゃ、オレはもう行くから、お前らほどほどにしておけよ」

しーちゃん 「うん」

黒縄先生 「(リーレに)じゃあな」

リーレ 「はい」

黒縄先生、退場。

しーちゃん 「お姉ちゃん、ぶつかったお姉ちゃんだよね」

リーレ 「ええ。覚えてたの」  
リーちゃん 「ごめんなさい。痛くなかった？」  
リーレ 「平気よ。私もごめんね」  
リーちゃん 「ううん。ねえ、お姉ちゃんも遊ぶ？今からかったんとグリコすんの」  
かったん 「えー、オレもうグリコ飽きたよお」  
リーちゃん 「じゃあ何がいい？ お姉ちゃんは？」  
リーレ 「私は何でもいいわ」  
かったん 「えー、鬼ごっことか？」  
リーちゃん 「かったんそんなに走ったらダメだよお」  
かったん 「そっか」  
リーレ 「かったんの病気、大変なの？」  
かったん 「あ、うん。でも、ちょっとだけな」  
リーレ 「そっか……」  
リーちゃん 「でもかったんすごく頑張ってるから、絶対もうすぐ治るんだよ」  
かったん 「おお」  
リーレ 「うん。信じてお祈りしてたら、きっとすぐに治るわ」  
リーちゃん 「お祈り？」  
リーレ 「こう、指を組んで、目を閉じるの。誰かを想う気持ちほど強いものはこの世にないんだよ」  
リーちゃん 「ほんと？ 私がお祈りしたら、かったん、学校いける？」  
リーレ 「もちろん」  
かったん 「祈って治りや苦労しないよ……」  
リーレ 「あら、祈りの力って強力な魔法なのよ。バカにしちゃいけないわ」  
リーちゃん 「魔法！ ほんとうに？」  
リーレ 「あのなあ……」  
リーちゃん 「じゃあ、何かお祈りしてみよ。いい？ 今すぐに出来ることよ、何か思い付く？」  
リーちゃん 「え、……うーん、……かったん何かある？」  
リーちゃん 「え？ えー、んー、……じゃあオレ、雪見たいなあ」  
リーレ 「え、雪？」  
リーちゃん 「そう。うーんと遊べるぐらいにさ、こう、ドバドバつとさあ？」  
リーレ 「……それだけ降ったら、雪だるまも作れて楽しいだろうね」  
リーちゃん 「え、雪だるま！」  
リーレ 「そーだなー」

リーレ、静かに足の上に手を起き、指を組む。目を閉じる。

2人、それぞれのリアクションでリーレを見つめている。  
雪がしとしとと降り始める。

「え、雪だあ」

「嘘だろ」

「雪だ、お姉ちゃん雪降ったよ」

リーレ  
「(微笑む)」

「わあ、すごい、雪だ」

「どんどん降れー！」

「どんどん降れー！」

と、2人はしゃいでいる。

リーレ、2人を見つめている。

また目を閉じる。

しーちゃん、かったん、はしゃいでいる。

雪が降っている。いつまでも、いつまでも。

視界が真っ白になり、きつと雪だるまを作れるほどに。

雪は降る。いつまでも。

—了—